埼玉県入間郡三芳町

古井戸山（ふるいどやま）遺跡発掘調査報告書

埼玉県広域第一水道用水供給事業南側その一工区送水管布設工事に伴う調査

1990．3

埼玉県入間郡三芳町教育委員会

巻頭図版 1

古井戸山遺跡（航空写真）

はじめに

三芳町教育委員会
教育長　岡村　顕

三芳町は、純農村地帯として昔から武蔵野の雑木林と田園風景が広がり、自然に恵まれた町として知られておりましたが、近年、急激な都市化の進行によりその姿を変貌させつつあります。

このような状況のなかにあって、三芳町では開発の影響を受けやすい埋蔵文化財の保護を教育行政の重点施策の一環として実施してまいりました。

本書は、埼玉県広域第一水道水供給事業の送水管布設工事に先立ち、埼玉県企業局より三芳町が委託を受けて実施した古井戸山遺跡記録保存調査の成果をまとめたものです。

調査の結果多くの貴重な成果を上げることができ、本報告書を刊行できますことは、ひとえに関係各位のご理解とご助力のたまものと心より厚く御礼申し上げます。

本書が多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を深めるとともに、貴重な郷土の歴史・文化遺産を受け継ぎ、より一層の発展をしていくための一助となれば幸いと考えます。

例　言

1．本書は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字南側933番地他に所在する古井戸山遺跡（県遺跡番号32-003）の発掘調査報告書である。

2．調査は、埼玉県広域第一水道用水供給事業南側その１工区送水管布設工事に先立つ事前調査であり、埼玉県企業局の委託により三芳町が受託し、三芳町教育委員会が主体となり実施したものである。

3．発掘調査及び本報告書作成に要した経費は埼玉県企業局が負担し、その額は8,800,000円である。

4．発掘調査は、平成元年２月１日～平成元年６月30日、遺物整理作業は平成元年12月１日～平成２年２月28日、本書作成のための作業は平成２年２月２日～平成２年３月14日に行なった。

5．本書の原稿執筆・編集は柳井章宏が担当した。

6．本書における写真は航空写真をK&Mエンタープライズ㈱、その他を柳井が撮影した。

7．出土品整理及び図版の作成は柳井が担当した。

8．本書における縮尺等の図版の読み方はそのつどそれぞれの図で説明した。

9．本書に掲載した地図は国土地理院発行の1/25,000地形図「志木」「与野」・及び三芳町発行の1/2,500三芳町全図である。

10．発掘調査および出土品の整理・報告にあたり下記の諸氏・関係機関にご教示ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

会田　明、荒井幹夫、飯田充晴、井上　肇、小出輝雄、小渕良樹、佐々木保俊、笹森健一、斯波　治、高崎直成、坪田幹男、和田晋治、県文化財保護課、

［ご協力を頂いた方々］

池上昭平、池上泰男、池上健治、池上かね、池上保治、抜井定雄、森田岱二、竹間沢第一区

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次
調査組織と参加者
第１章　調査の経緯…… 1
第２章　古井戸山遺跡周辺の位置と環境…… 2
　　１．三芳町の位置と環境…… 2
　　２．地理的位置 …… 2
　　３．考古学的環境 …… 4

第３章　遺跡の概要…… 6
　　１．遺跡の概要 …… 6
　　２．調査の方法 …… 6
　　３．層　位…… 6
第４章　旧石器時代の遺構と遺物…… 8
第５章　縄文時代の遺構と遺物……15
第６章　弥生時代の遺構と遺物……21
第７章　その他の遺構……23
　　まとめ……25

挿図目次

第１図　周辺の地形と遺跡 …… 5
第２図　古井戸山遺跡調査位置図 …… 7
第３図　調査地全測図 …… 8
第４図　旧石器時代遺物石材別分布図 …… 9
第５図　旧石器時代ユニット想定図 …… 10
第６図　ユニット１遺物器種別分布図 …… 11
第７図　ユニット２遺物器種別分布図 …… 12
第８図　２号住居跡平面図 …… 16
第９図　３号住居跡平面図 …… 17
第10図　遺構外出土器拓影図（１） …… 19
第11図　遺構外出土器物拓影図（２） …… 20
第12図　１号住居跡平面図 …… 22
第13図　１号住居跡炉平面図 …… 22
第14図　焼土跡平面図 …… 24
第15図　土坑平面図 …… 24

表目次

表１旧石器時代出土遺物一覧 …… 13

図版目次

巻頭図版１　古井戸山遺跡（航空写真）
写真図版１　古井戸山遺跡遠景（航空写真）
調査区全景（航空写真）
写真図版２　土層写真・調査風景
写真図版３　旧石器時代遺物出土状況（Ⅳ層）
旧石器時代遺物出土状況
写真図版４　Ⅳ層遺物出土状況
Ⅵ層遺物出土状況
写真図版５　２号住居跡
調査風景
写真図版６　３号住居跡遺物出土状況
３号住居跡完掘
写真図版７　１号住居跡遺物出土状況
１号住居跡
写真図版８　１号住居跡完掘
１号住居跡炉
写真図版９　焼土跡完掘
土坑検出状況

写真図版10　ユニット１出土石器
　　ユニット２出土石器
写真図版11　遺構外出土土器（１）
写真図版12　遺構外出土土器（２）
写真図版13　１号住居跡出土遺物

調査組織と参加者

調査組織

調査主体者　三芳町教育委員会
　　教育長　岡村　顕
調査事務局　高橋昭夫　（三芳町立歴史民俗資料館長：平成元年３月退任）
　　森田陽一郎（三芳町立歴史民俗資料館長：平成元年４月着任）
　　馬場初江　（三芳町立歴史民俗資料館主任）
　　秋山伸一　（三芳町立歴史民俗資料館主事補・学芸員）
　　佐藤雅之　（三芳町立歴史民俗資料館主事補・平成元年10月着任）
調査担当者　松本富雄　（三芳町立歴史民俗資料館副館長・学芸員）
　　柳井章宏　（三芳町立歴史民俗資料館主事・学芸員）

発掘調査・整理作業参加者（調査協力員）

池上英雄、井砂恒次、井砂トシ、一色玲子、井上麻美子、浦　則子、大島　浩、大谷明子、小野沢紋太郎、明松慶子、川原優子、河野俊郎、斉藤常吉、佐伯久美、佐藤徳子、杉野栄、椿恵子、坪山則子、寺田きよ子、豊島礼子、中山萬里子、西尾信子、新田登和子、塙和男、比嘉洋子、細沼豊次、真尾節子、真鍋紀美子、宗村晶子、柳下久美、柳下ケイ子、山内ゆき子、若林紀美代

第1章　調査の経緯

古井戸山遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字南側933,934,935,941,942,950,951-1,952番地先、町道竹間沢18号線内に存在する。

古井戸山遺跡の発掘調査は、埼玉県広域第一水道用水供給事業南側その1工区送水管布設工事に先立つ埋蔵文化財記録保存調査として実施された。

当該地の周辺は以前の発掘調査・分布調査等の結果により埋蔵文化財の包蔵地であることが確認されていたため、工事に先立ち埼玉県企業局および埼玉県教育委員会より三芳町教育委員会に発掘調査の依頼がなされた。以下に、本書作成までの経緯の概略を記しておく。

昭和63年10月28日　埼玉県第一水道建設事務所・埼玉県教育委員会・三芳町教育委員会の3者による古井戸山遺跡埋蔵文化財の取り扱いについて、第1回打ち合わせが行われる。

昭和63年11月18日　第一水道建設事務所と三芳町教育委員会で第2回打ち合わせが行われ、調査期間・経費等について内諾を得る。

昭和63年11月21日　第一水道建設事務所より三芳町教育委員会へ埋蔵文化財包蔵地記録保存調査依頼書が提出される。

昭和63年11月29日　埼玉県教育委員会より三芳町教育委員会へ広域水道用水供給事業地内における埋蔵文化財の発掘調査の実施について依頼が成される。

昭和63年12月20日　埼玉県企業局と三芳町との間で古井戸山遺跡埋蔵文化財記録保存調査に関する協定書が取り交され、併せて昭和63年度業務委託契約が締結される。

昭和63年12月27日　企局一水第471号により埋蔵文化財発掘の通知が文化庁宛に提出される。

平成元年1月17日　三芳歴発第12号により埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁宛に提出。

平成元年2月1日　三芳町教育委員会は委託契約に基づき発掘調査を開始する。

平成元年2月10日　基準点測量および杭の設置を終了する。

平成元年3月14日　ローム層の掘り下げ開始。

平成元年3月23日　昭和63年度業務委託契約書の一部変更契約を締結する。

平成元年3月30日　航空写真撮影を実施する。

平成元年4月1日　平成元年度業務委託契約を締結する。

平成元年4月4日　平成元年度調査区の調査を開始する。

平成元年4月17日　昭和63年度調査区の引き渡しを行う。

平成元年6月30日　現地調査を終了し引き渡しを行う。

平成元年12月1日　遺物整理作業に入る。

平成元年2月2日　報告書作成に入る。

平成2年3月14日　原稿の執筆を終わる。

第２章　古井戸山遺跡周辺の位置と環境

１．三芳町の位置と環境

三芳町は埼玉県南西部の荒川右岸に位置し、西方には霊峰富士と秩父連山を遠望する平野地帯である。

西方約50km の青梅市付近より扇状に広がる武蔵野台地の北東部にあたり、台地縁辺から切り込む開析谷により僅かな起伏をもつものの、その殆どが関東ローム層に厚く覆われた平坦な地形を呈する。

三芳町は、上述のように関東ローム層の厚く堆積した台地が占め、特に町西部域は河川も少なく、広々とした台地が続く。そのためであろうか現在までのところ町西部域において原始古代の集落跡（遺跡）の確認はされておらず、久しく人々が住せぬところであったようである。

現在見られる西部域の集落は、江戸時代の新田開発によるものであるが、中でも元禄７年川越藩主柳沢吉保の命により行われた三富の開拓地（三芳町大字上富、所沢市中富・下富）は、埼玉県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」に指定されており、今なお雑木林と畑地と集落との整然とした区画が残され、武蔵野の開拓の面影をとどめ現在に伝え残している。

一方、町東部域はより武蔵野台地の縁辺に近く、柳瀬川を始めとした荒川の沖積面に向かう数条の河川や開析谷が台地を切り込むように存在する。これらの河川に沿って古くから開発が進み、西部域とは異なった様相を呈し原始・古代の遺跡も多く存在する。

近年まで三芳地域は自然環境に適応しつつ純農村地帯として緩やかな発展を遂げてきたが、都心より30km 圏内にあることから都市化の波を強く受け、急激な変化をしつつある。町の東隣を走る東武東上線の地下鉄相互乗り入れ、関越自動車道路の貫通と町の南隣の所沢インターチェンジの設置等の交通手段の改善は、工場・倉庫等の企業進出や個人住宅・アパート・マンション等の住宅建設を促進させる結果となった。特に町東部域（藤久保・竹間沢地区）の開発は目覚ましく、年々農地が宅地や倉庫に姿を変えつつある。

三芳町にはおおよそ40か所の埋蔵文化財包蔵地が知られるが、当然のことながら開発行為は埋蔵文化財包蔵地内にも及び、破壊の危機にさらされてきている。このような状況の中で埋蔵文化財は蚕食的に蝕まれ、すでにそのうちの一部は住宅開発等により煙滅してしまったものも少なくない。

２．地理的位置

三芳町の位置する武蔵野台地は、関東平野の西南部に位置し、東西約40km、南北約30km に及ぶ大規模な台地として知られる。武蔵野台地の西北部は加治丘陵（阿須山丘陵）と入間川が境となり、北東部は荒川の沖積低地で終る。西南部は、多摩川の沖積低地が境となり、南東部は東京湾岸のいわゆる下町低地である。

武蔵野台地は、奥多摩の山地より流れ出る多摩川の開析扇状地であるといわれ、その扇頂に

あたる青梅付近で標高180m を測り、立川で約85m 所沢で約60m、三芳付近で約40m と東に向かうに従い次第に低下し、武蔵野台地の東端部では標高約20m となり荒川低地へ至る。台地の東端部には、沖積地に向かう幾つかの谷が形成されており急崖を成している。

三芳町はこの武蔵野台地の北東縁辺部に近い部分に位置しており、町西部域は標高約45m を測り、殆ど平坦な地形を呈する。一方、町東部域にはその東方の沖積地（荒川低地）に向かう谷が現在５条存在する。

この５条の谷を南からみていくと、まず、三芳町と新座市・志木市を大きく割している谷が多摩川の名残川と呼ばれる柳瀬川によって形成された谷である。埼玉県内の武蔵野台地を、便宜上この柳瀬川を流す谷を境に左岸を川越台地、右岸を野火止台地と呼ぶことがある。

次に通称唐沢堀と呼ばれる堀割を通す谷が、川越街道付近に谷頭をもち、大字竹間沢と大字藤久保の間に形成されている。以前は谷頭付近に湧水があったと聞くが、現在は工場が建設され埋め立てられている。この谷は三芳町内において比高差約５m 程の緩傾斜をもって開析し、富士見市関沢字八ヶ上付近（東武東上線みずほ台駅と鶴瀬駅の中間）で江川を流す谷に合流する。

唐沢堀の谷と合流する江川を流す谷は、大字藤久保字東の川越街道付近に谷頭をもち、東方に延びている。この谷は、上述の唐沢堀を流す谷と富士見市字八ヶ上付近で合流し、谷幅を広げ富士見市水子字打越付近で沖積面に至る。

大字藤久保字浅間付近の富士見市境にも緩やかな谷が入り込んでいる。しかし、この谷は三芳町内域にごく僅かに入り込んでいるのみである。

最後に、三芳町と大井町の行政界付近に緩い谷が形成されている。これは武蔵野台地の特徴といえる未無川の一つである砂川を流す谷である。砂川の流れは狭山丘陵に端を発するが、三芳町まで流れは至らず所沢市中富付近で消滅する。三芳町付近の砂川の谷は、雨水排水用の堀割として存在する。

以上のように三芳町には台地を開析する５条の谷が形成されているが、柳瀬川の谷を除く他の４条の谷はいずれも緩やかな開析である。しかし、これらの谷が延びる富士見市の台地端部付近では、いずれも谷底を深くし、台地を切り裂くような急崖を呈する。

3．考古学的環境

三芳町には約40か所の遺跡が知られる。このうち１か所は埼玉県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」であり、江戸時代中期の武蔵野における新田開発の村落形態の名残をとどめている。残りの全ては原始・古代を中心とした埋蔵文化財を包蔵する遺跡である。原始・古代の遺跡の殆どは谷を臨む台地上に位置するため、地形的条件により三芳町では町東部域に遺跡の集中が見られる。

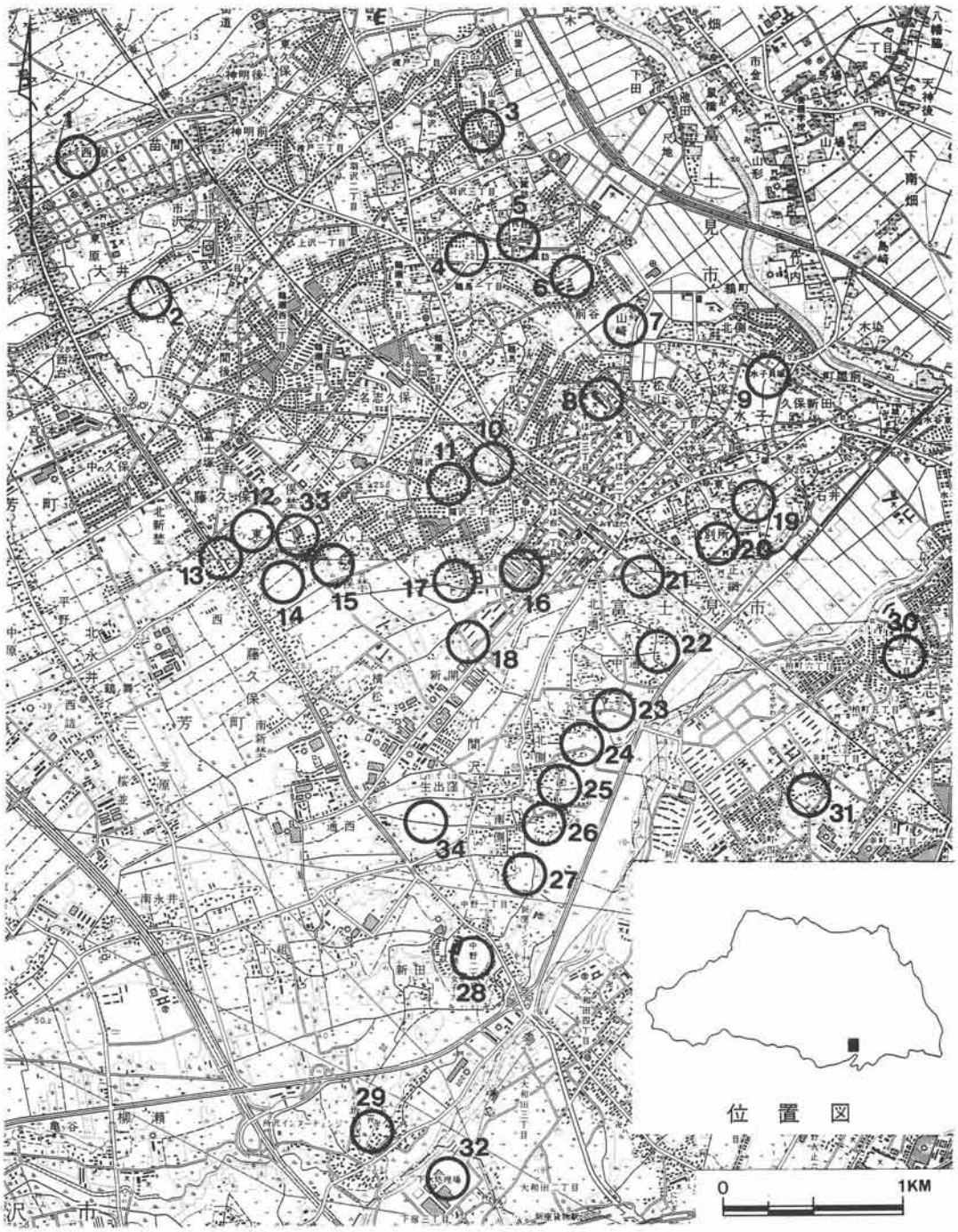
柳瀬川を臨む台地上には、遺跡が連続して見られる。第１図に示した範囲で数えるだけでも左岸に11か所、右岸に３か所の遺跡が知られる。柳瀬川に面した遺跡のうち、左岸に位置する三芳町内には上流より古井戸山遺跡(27)、本村南遺跡(26)、本村北遺跡(25)、北側遺跡(24)が知られる。本村南遺跡は、かつて弥生時代中期末葉（宮ノ台式）の土器が出土したことで知られる。また、近年の発掘調査により弥生時代中期末葉から弥生時代後期末葉を中心とする集落遺跡として位置付けられよう。隣接する古井戸山遺跡からは、今回報告するように旧石器時代、縄文時代早期～中期、弥生時代前期～後期、平安時代、中世の遺物が認められ、縄文時代から弥生時代を中心とする複合遺跡として捕えることができよう。下流の南通遺跡(23)、北通遺跡(22)、上流の新座遺跡(28)、右岸に位置する柏之城遺跡(30)西原大塚遺跡(31)も弥生時代の遺跡として知られる。このように柳瀬川下流域には弥生時代の遺跡が集中していることが分かる。これは、比較的広い沖積地が発達していることや、台地縁辺からの湧水により小さな谷戸が数多く存在することが、初期の水稲耕作の生産基盤として適していたためであろう。

唐沢堀を流す谷に沿って、右岸に新開遺跡(18)がある。新開遺跡は昭和51年から調査が進められ、旧石器時代キャンプ跡や平安時代の窯跡が発見されたことで知られる。対岸の三芳唐沢遺跡(17)、やや下った位置に松ノ木・唐沢遺跡(16)が存在し旧石器・縄文時代の資料が検出されている。

江川水源付近の右岸には、俣埜遺跡(15)が存在する。過去数回の発掘調査が行われ旧石器・縄文・平安時代の複合遺跡として捕えられる。水源より開析谷はさらに奥に入り込み、谷に沿って４か所の遺跡が知られる。右岸には藤久保遺跡(13)、藤久保東第二遺跡(14)が存在する。藤久保東第二遺跡からは、Ⅰb期からⅠc期の石器群が検出されている。左岸には、藤久保東遺跡(12)、藤久保東第三遺跡(33)が存在する。共に旧石器時代から縄文時代にかけての遺物・遺構が検出されており、藤久保東第三遺跡からは、対岸に存在する藤久保東第二遺跡とほぼ同時期の石器が検出され、その関連が注目される。

江川下流域（富士見市域）には、左岸に本目遺跡(11)、隆起線文土器を出土した八ヶ上遺跡(10)縄文前期・奈良時代の集落跡が発見された殿山遺跡(６)が存在する。右岸には、旧石器や縄文前期の貝塚で知られる打越遺跡(８)や山崎遺跡(７)が存在する。

このように、三芳付近には武蔵野台地縁辺部より切り込む開析谷が多く存在しており、これらに面した高台には必ずと言ってよいほど遺跡が集中して存在する。



第1図　周辺の地形と遺跡

1　西原遺跡　2　大井東台遺跡　3　山室遺跡　4　羽沢遺跡　5　黒貝戸遺跡　6　殿山遺跡　7　山崎遺跡　8　打越遺跡　9　水子貝塚　10　八ヶ上遺跡　11　本目遺跡　12　藤久保東遺跡　13　藤久保遺跡　14　藤久保東第二遺跡　15　俣埜遺跡　16　松ノ木・唐沢遺跡　17　三芳唐沢遺跡　18　新開遺跡　19　富士見東台遺跡　20　正網遺跡　21　栗谷津（北別所）遺跡　22　北通遺跡　23　南通遺跡　24　北川遺跡　25　本村北遺跡　26　本村南遺跡　27　古井戸山遺跡　28　新座遺跡　29　滝之城遺跡　30　柏之城遺跡　31　西原大塚遺跡　32　下宿遺跡　33　藤久保東第三遺跡　34　生出窪遺跡

第３章　遺跡の概要

１．遺跡の概要

古井戸山遺跡は、埼玉県入間郡三芳町大字竹間沢字南側933番地先他に存在する。本遺跡は武蔵野台地を開析する柳瀬川の左岸台地縁辺部に位置し、柳瀬川に面する崖線には中小の谷戸が発達し、崖下には湧水源が点在している。また、今回の調査区と交差する形で鎌倉街道と呼ばれる古道が走っている。

古井戸山遺跡の範囲は、過去の分布調査等の結果から約30,000m^{2}の広がりを持つと推定されており、時期は縄文時代早期・前期、縄文時代後期～弥生時代前期、弥生時代中期～後期、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の各時代にわたる複合遺跡であると判断されている。また近年、旧石器時代の遺物の表面採集があったと伝えられており、旧石器時代からの複合遺跡である可能性を含んだ遺跡であった。

今回の調査により検出された遺構は、旧石器時代の石器製作跡２か所、縄文時代の住居跡２軒、弥生時代の住居跡１軒、時期不明の土坑１基・焼土跡１か所であり、旧石器時代からの複合遺跡であることが確認された。

２．調査の方法

発掘調査は、グリット（Grid）法により行った。重機により調査区内の表土を除去した後、OV－13（X＝-20120.00, Y＝-25540.00）を基点とし、５m×５mのグリッドを調査区全域に設定した。グリッドは南北軸を数字ラインとし、東西軸をアルファベットラインとした。グリッドの名称は、北東隅の基点（グリッドポイント）を名称とした。

ローム（Loam）層中の遺構・遺物の検出にあたっては、５m×５mのグリッドの中に２m×２mの試掘溝を設定し掘り下げ、遺物・遺構が確認されたトレンチを拡張していく方法で実施した。

出土遺物は可能な限り実測・記録するように努めた。実測の方法はグリッドを基準として行なった。

３．層　位

本遺跡の層位は、三芳町藤久保東第三遺跡の層位（松本・柳井1987）とほぼ同様であるため三芳町におけるローム層基本土層の表記に拠るものとする。本遺跡の場合Ⅰ層（表土層）Ⅱ層（ローム漸移層）は削平のため遺存しておらずⅤ層（立川ローム第一黒色帯）は検出されなかった。

Ⅲ層　黄暗褐色土　所謂ソフトローム。

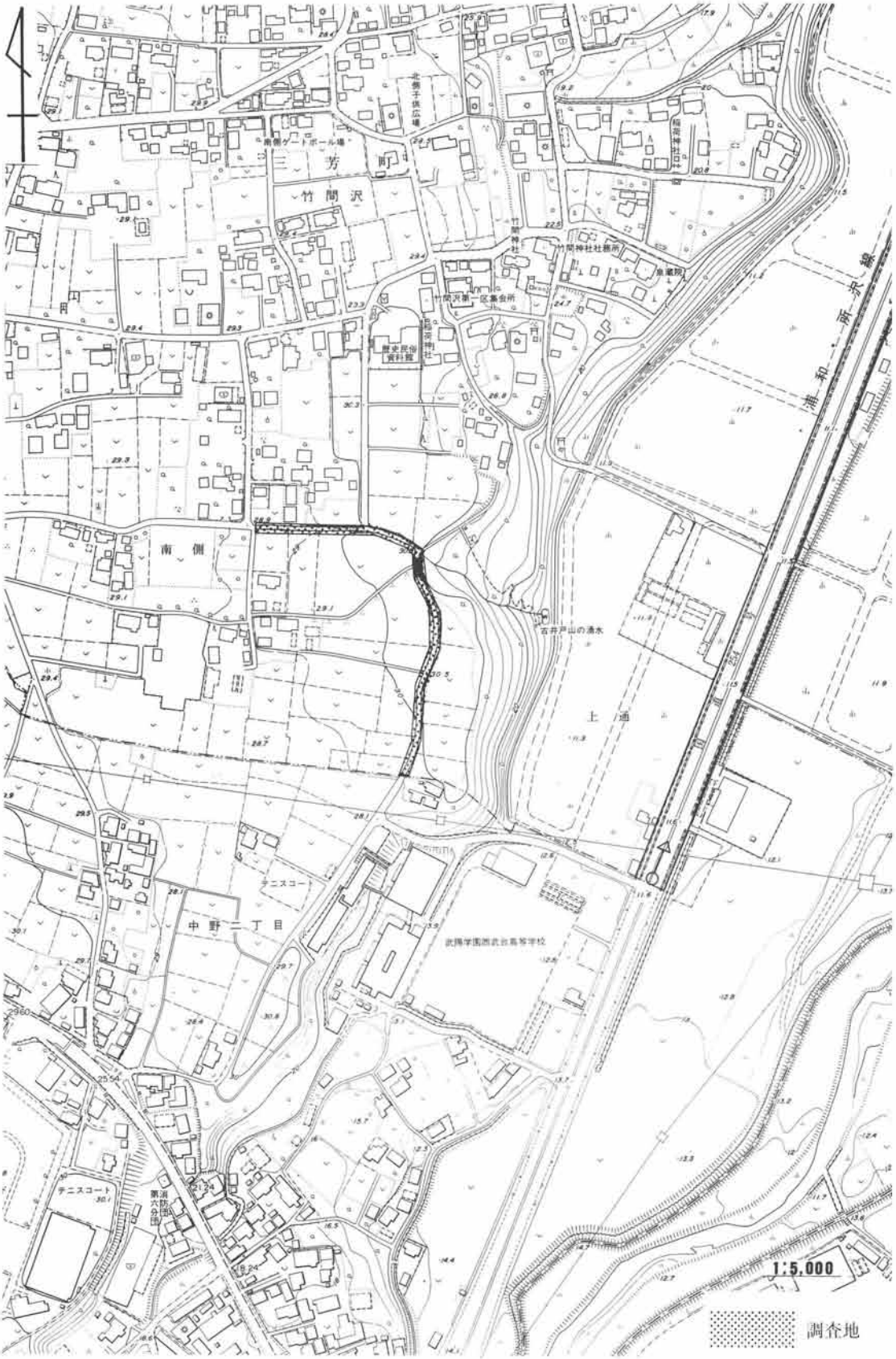
Ⅳ層　黄褐色土　所謂ハードローム。赤色スコリアを若干含有する。

Ⅵ層　黄褐色土　0.5mm大のガラス質粒子（姶良・丹沢パミス）を多量に含有する。

Ⅶ層　黄暗褐色土　立川ローム第二黒色帯上層部。灰色・赤色スコリアを含有する。

Ⅷ層　黄暗褐色土　白色粒子を多量に含有し、ブロック状に検出される。

Ⅸ層　暗褐色土　立川ローム第二黒色帯下層部。Ⅶ層に比べ粘性が強くスコリアを含有する。



第２図　古井戸山遺跡調査位置図

第４章　旧石器時代の遺構と遺物

１．遺構と遺物

今回の調査では、５ｍ×５ｍのグリッドの中に２ｍ×２ｍのトレンチを基本として設定し開掘して行くのを原則とし、遺構（遺物）の検出されたトレンチの周囲を拡張していく方法を採用して行なった。

遺構はⅣ層下部より石器ユニット１か所、Ⅵ層中より石器ユニット１か所の計２か所のユニットの検出があった。以下にそれぞれのユニットについて述べていく事とする。

石器ユニット１（Uni. 1）

本遺構は、調査区のほぼ中央Ｃ－８区・Ｃ－９区・Ｄ－８区・Ｄ－９区にまたがって位置する。出土層位はⅥ層上面から中面にかけてである。上層部には石器ユニット２が存在する。遺物の広がりは、Ｄ－８・９区を中心として北西から南東方向へ楕円形状を呈するように７ｍ×4.5m の範囲で広がりをもつが、調査区外へ伸びている可能性が高いために全体規模は更に広がると考えられる。

検出された遺物の総点数は56点を数える。内訳は、ナイフ型石器１点・スクレイパー１点、加工痕を有する剝片４点・剝片22点・砕片24点・焼礫４点である。石材は、その殆どが黒曜石であり、他は石英１点・凝灰岩１点・チャート２点であった。

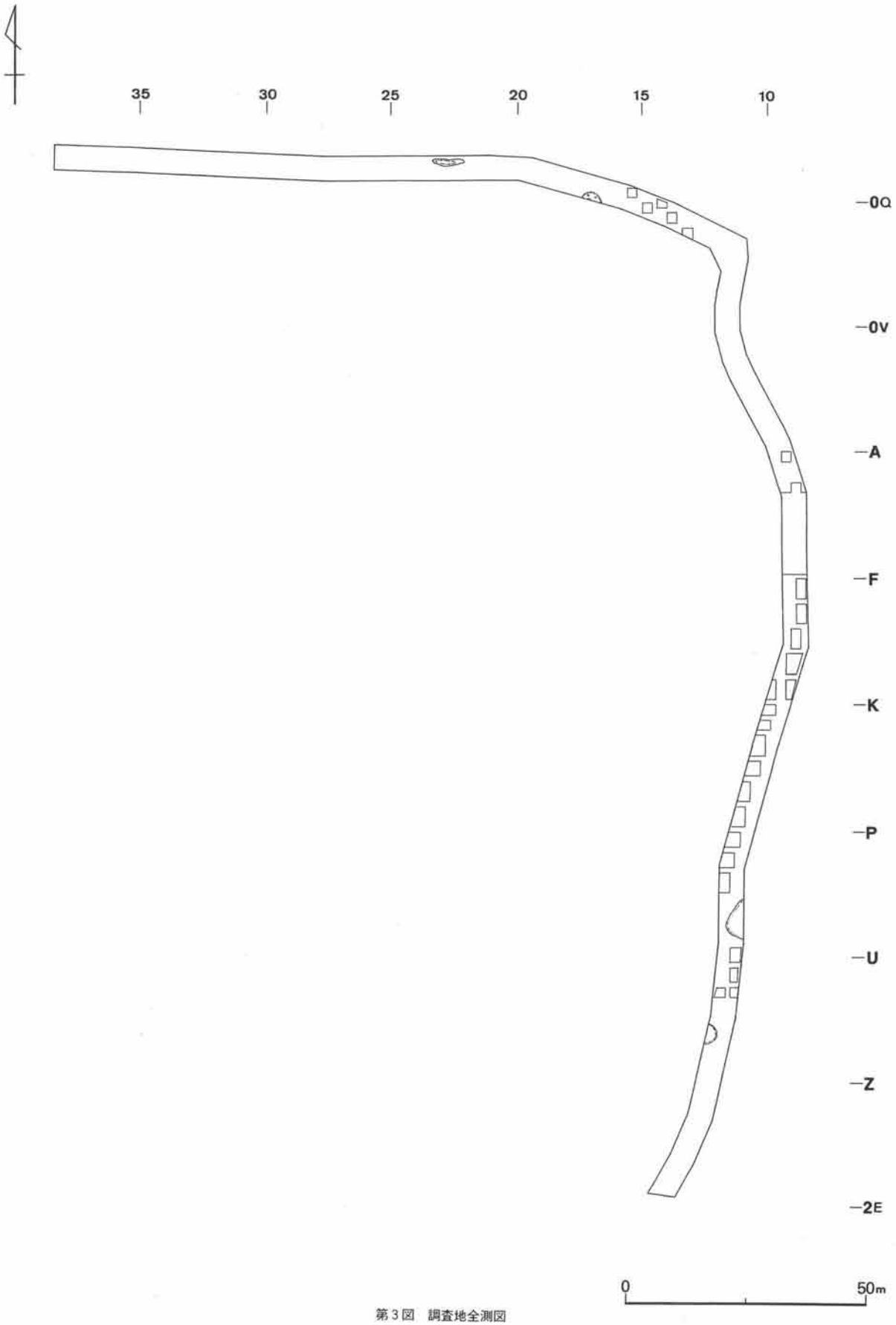
本遺構から検出された遺物はその殆どが同質に近い母岩から取られた剝片・砕片であり、製品が非常に少ない様に思われる。今後、詳細な遺物の観察検討を行ない当ユニットの性格を明らかにする必要があろう。

石器ユニット２（Uni. 2）

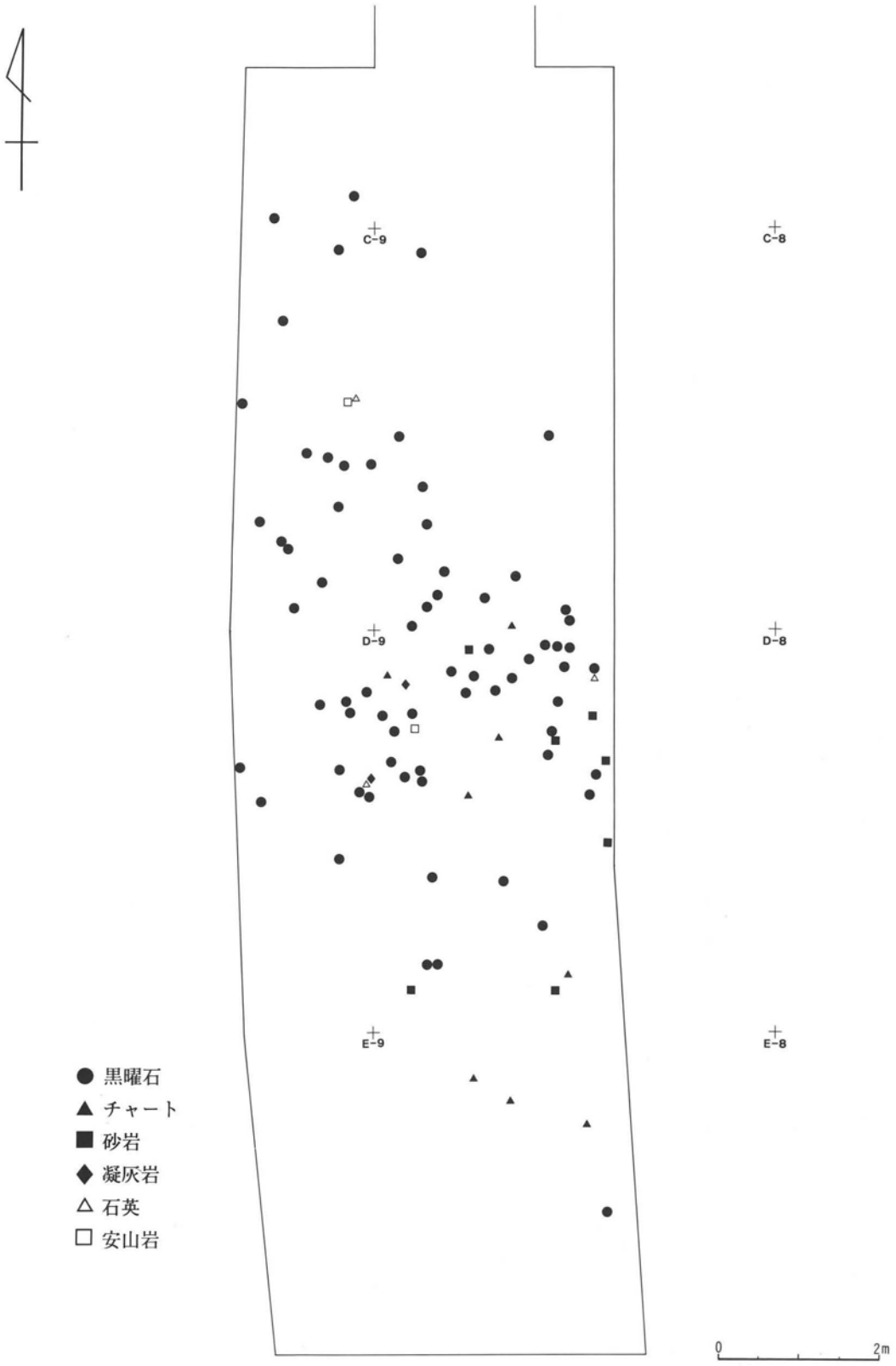
本遺構は、調査区のほぼ中央Ｃ－８区・Ｃ－９区・Ｄ－８区・Ｄ－９区・Ｅ－９区にまたがって位置する。出土層位はⅣ層下部である。本遺構の下には石器ユニット１が存在する。遺物の広がりは下層部の石器ユニット１と中心部が重なるように北西から南東に向かって16ｍ×４ｍの楕円形を呈する形で検出された。しかし、当ユニットの場合も石器ユニット１と同様に遺物分布範囲が調査区外へ伸びている可能性が高く全体規模は不明である。

検出された遺物の総点数は36点を数える。内訳はナイフ型石器１点・スクレイパー１点・加工痕を有する剝片６点・剝片15点・砕片10点・焼石３点・破砕礫１点である。石材はその殆どが黒曜石であり、それにチャート・石英・安山岩が若干含まれる。

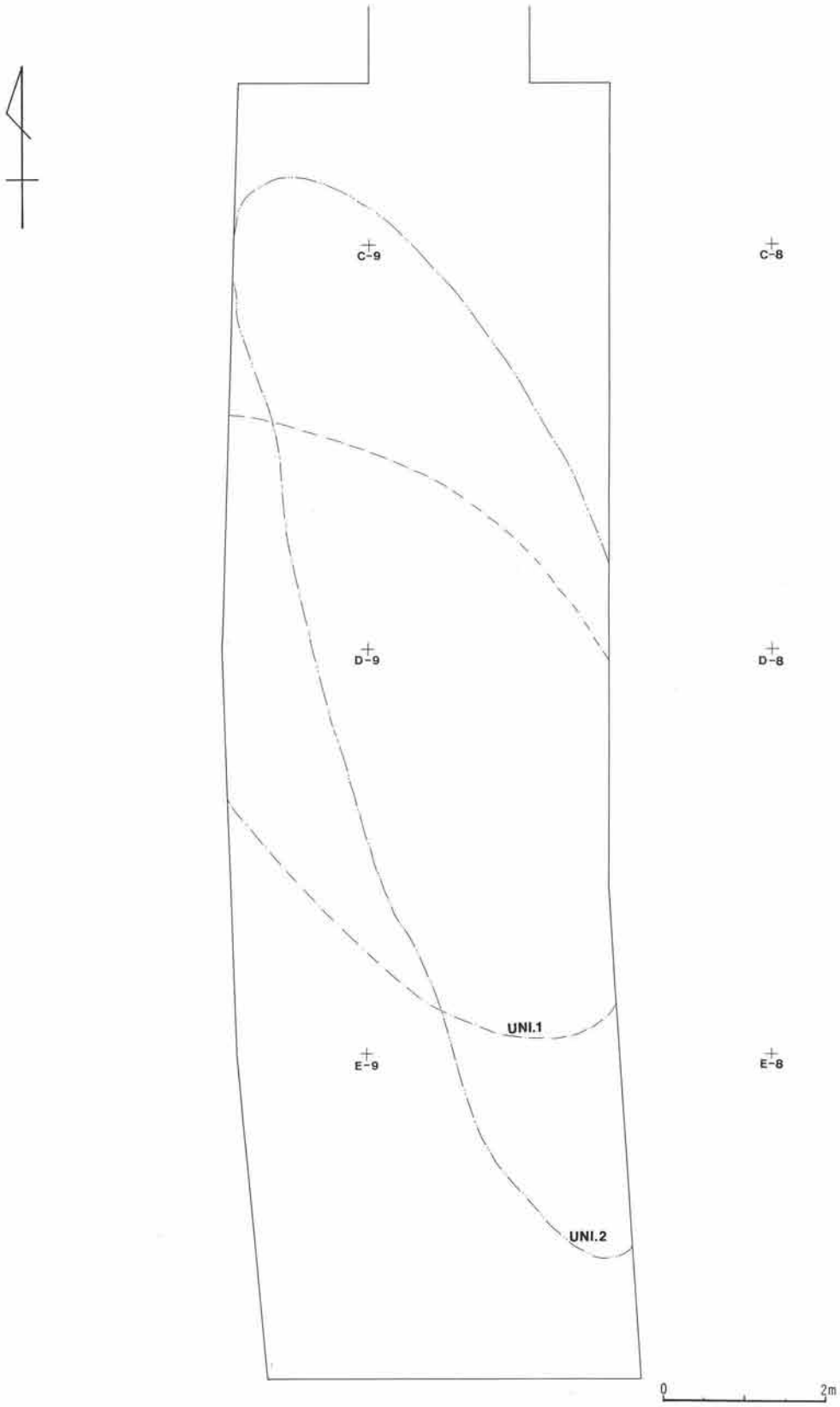
今回の報告では、時間的な制約もあり事実報告のみにとどめたが、今後石材等について詳細な検討を行なっていきたい。



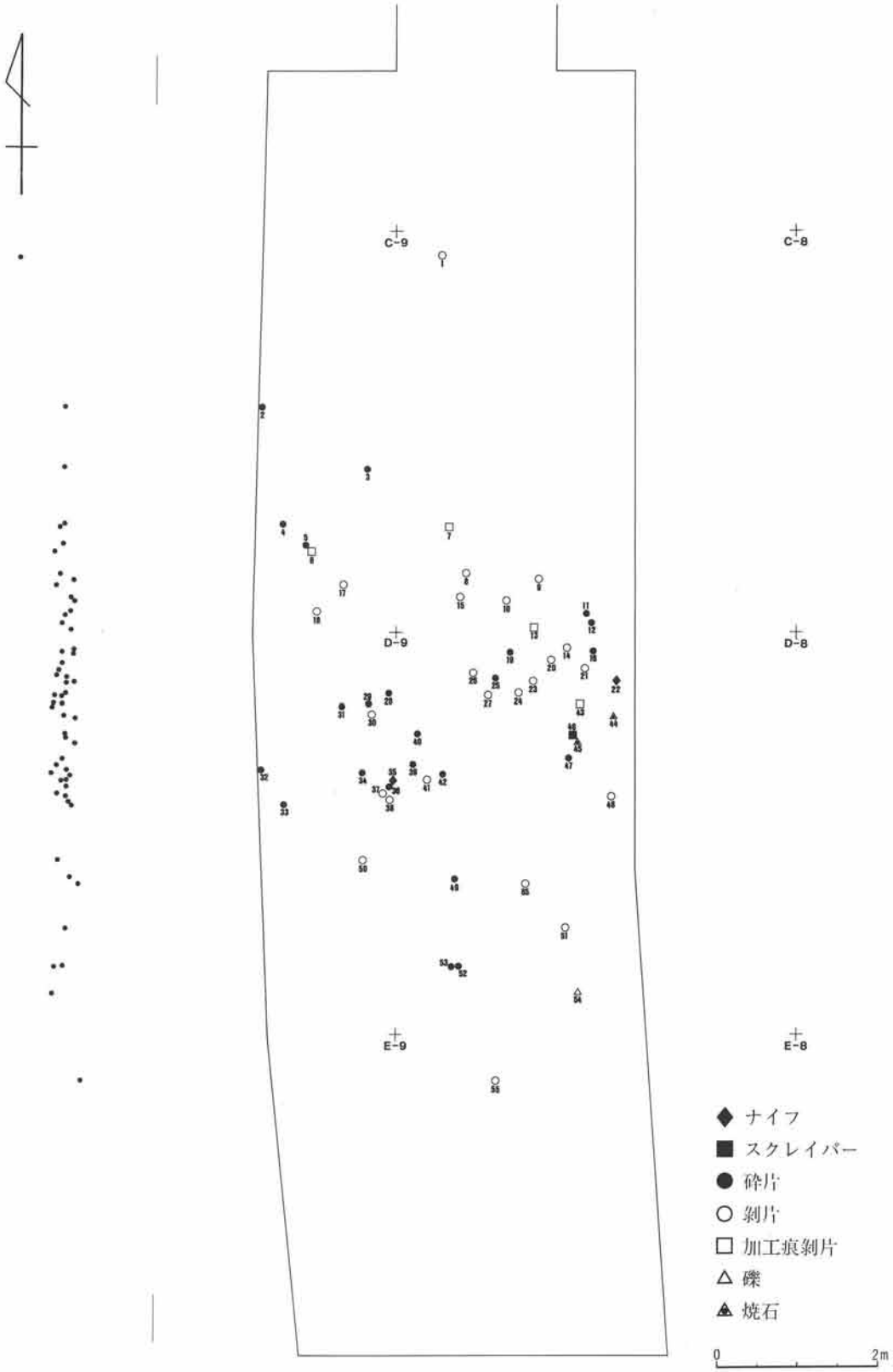
第3図　調査地全測図



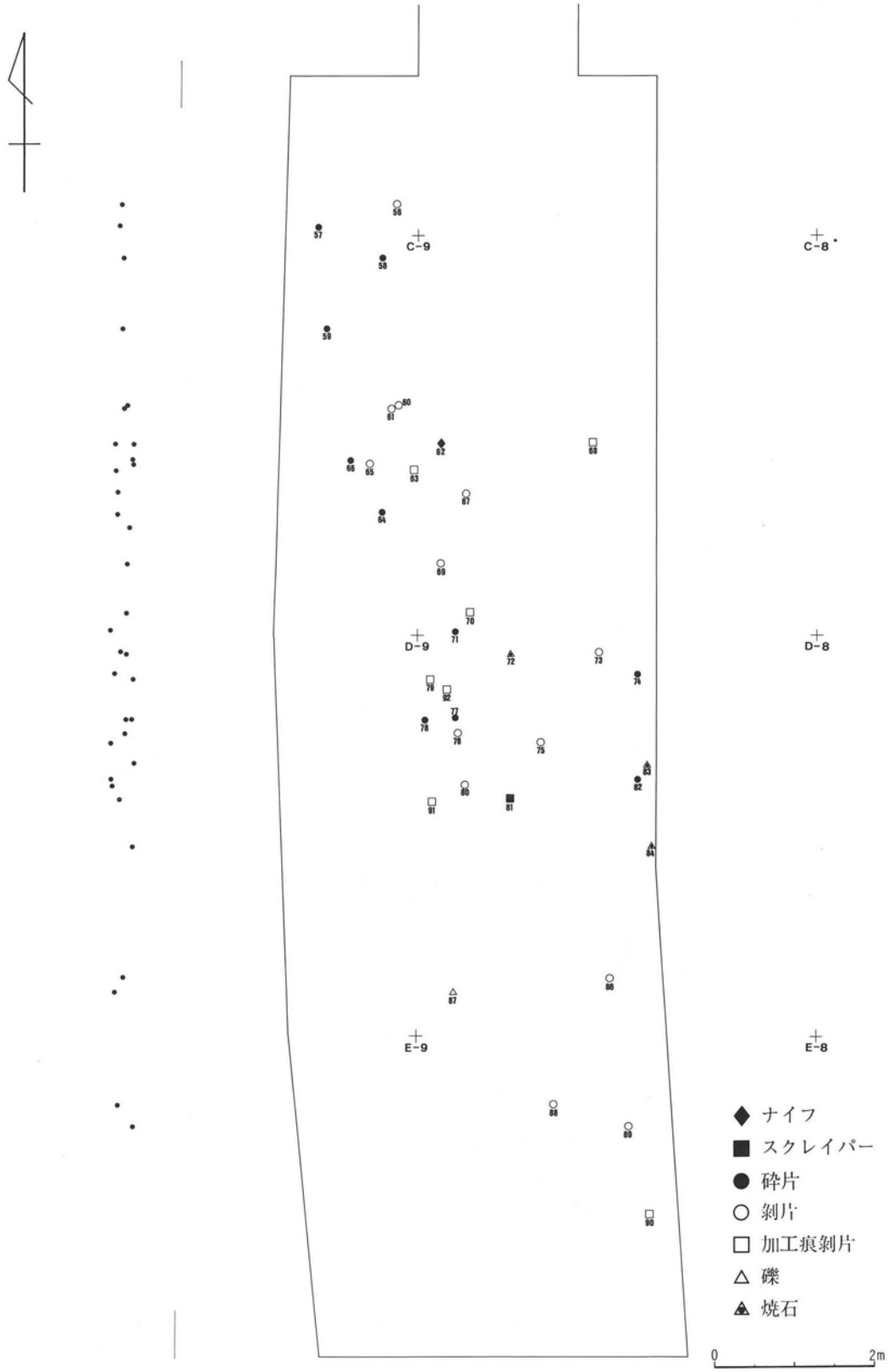
第４図　旧石器時代遺物石材別分布図



第５図　旧石器時代ユニット想定図



第６図　ユニット１遺物器種別分布図



第７図　ユニット２遺物器種別分布図

表1　古井戸山遺跡旧石器時代石器一覧

No.	器　種	石　質	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	重さ(g)	層位	注記No.
1	剝　片	黒曜石	25.1	22.1	12.15	3.7	Ⅵ	C－1
2	砕　片	黒曜石	11.3	8.8	3.2	0.2	Ⅵ	F－87
3	砕　片	黒曜石	10.05	8.05	1.2	0.1	Ⅵ	F－85
4	砕　片	黒曜石	10.2	7.4	4.75	0.2	Ⅵ	F－88
5	砕　片	黒曜石	10.95	5.3	2.95	0.1	Ⅵ	F－86
6	加工痕剝片	黒曜石	20.10	7.1	5.55	0.6	Ⅵ	F－70
7	加工痕剝片	黒曜石	26.9	16.15	5.95	1.5	Ⅵ	DE－30
8	剝　片	黒曜石	19.3	15.35	9.35	1.1	Ⅵ	DE－32
9	剝　片	黒曜石	24.25	16.2	11.15	3.1	Ⅵ	D－3
10	剝　片	黒曜石	24.2	11.4	4.2	1.1	Ⅵ	D－2
11	砕　片	黒曜石	17.75	8.9	4.85	0.3	Ⅵ	D－4
12	砕　片	黒曜石	18.7	9.5	7.95	0.8	Ⅵ	DE－26
13	加工痕剝片	チャート	35.2	10.65	9.15	2.7	Ⅵ	D－7
14	剝　片	黒曜石	17.4	8.35	6.95	0.9	Ⅵ	D－6
15	剝　片	黒曜石	33.9	18.75	10.85	4.4	Ⅵ	DE－20
16	砕　片	黒曜石	16.25	9.5	6.1	7.0	Ⅵ	DE－2
17	剝　片	黒曜石	23.2	11.7	5.4	0.9	Ⅵ	F－71
18	剝　片	黒曜石	23.55	14.25	9.05	3.2	Ⅵ	F－72
19	砕　片	黒曜石	19.1	8.2	4.1	0.3	Ⅵ	D－8
20	剝　片	黒曜石	25.5	14.45	8.95	1.9	Ⅵ	DE－48
21	剝　片	黒曜石	15.55	11.6	4.15	0.5	Ⅵ	DE－27
22	ナイフ	石　英	23.65	13.9	6.05	1.6	Ⅵ	DE－4
23	剝　片	黒曜石	20.8	14.25	4.75	9.0	Ⅵ	DE－5
24	剝　片	黒曜石	17.2	20.8	5.85	1.2	Ⅵ	DE－6
25	砕　片	黒曜石	17.1	12.7	5.1	1.0	Ⅵ	DE－21
26	剝　片	黒曜石	19.4	10.1	6.05	0.8	Ⅵ	DE－29
27	剝　片	黒曜石	25.1	19.45	7.3	2.5	Ⅵ	DE－7
28	砕　片	黒曜石	7.05	6.5	2.75	0.1	Ⅵ	F－77
29	砕　片	黒曜石	12.6	8.4	6.1	0.5	Ⅵ	F－75
30	剝　片	黒曜石	16.10	11.95	3.95	0.5	Ⅵ	F－76
31	砕　片	黒曜石	12.4	9.75	6.05	0.6	Ⅵ	F－74
32	砕　片	黒曜石	11.9	9.3	3.2	0.3	Ⅵ	F－89
33	砕　片	黒曜石	8.95	6.4	1.4	0.1	Ⅵ	F－90
34	砕　片	黒曜石	11.3	9.9	2.3	0.3	Ⅵ	F－78
35	ナイフ	凝灰岩	51.3	18.1	13.9	9.7	Ⅵ	F－79
36	砕　片	石　英	17.1	9.7	7.65	0.8	Ⅵ	F－80
37	剝　片	黒曜石	19.9	12.35	3.9	0.5	Ⅵ	F－81
38	剝　片	黒曜石	20.4	14.15	4.55	0.9	Ⅵ	F－82
39	砕　片	黒曜石	9.3	6.75	3.95	0.1	Ⅵ	DE－37
40	砕　片	黒曜石	11.55	8.15	4.75	0.2	Ⅵ	DE－36
41	剝　片	黒曜石	25.4	9.7	3.35	0.5	Ⅵ	DE－38
42	砕　片	黒曜石	14.8	8.1	2.95	0.2	Ⅵ	DE－22
43	加工痕剝片	黒曜石	20.8	10.5	6.15	1.1	Ⅵ	DE－28
44	焼　礫	砂　岩	40.1	28.85	13.2	15.1	Ⅵ	E－4
45	焼　礫	砂　岩	35.5	32.3	18.95	22.7	Ⅵ	E－3

46	スクレイパー	黒曜石	24.85	12.0	8.25	2.0	Ⅵ	DE－8
47	砕片	黒曜石	10.8	9.9	6.1	0.5	Ⅵ	E－12
48	剝片	黒曜石	17.85	10.2	3.6	0.3	Ⅵ	E－7
49	砕片	黒曜石	12.65	9.4	2.95	0.1	Ⅵ	DE－23
50	剝片	黒曜石	22.85	14.85	8.35	2.8	Ⅵ	F－83
51	剝片	黒曜石	17.45	16.75	4.2	1.2	Ⅵ	DE－25
52	砕片	黒曜石	16.9	9.2	6.95	0.8	Ⅵ	DE－14
53	砕片	黒曜石	11.85	6.0	3.9	0.1	Ⅵ	DE－43
54	礫	砂岩	89.6	62.95	22.65	175.5	Ⅵ	DE－47
55	剝片	チャート	15.9	10.9	4.75	0.5	Ⅵ	G－37
56	剝片	黒曜石	17.25	12.35	8.4	1.2	Ⅳ	F－12
57	砕片	黒曜石	15.55	7.4	2.05	0.2	Ⅳ	F－15
58	砕片	黒曜石	15.25	7.15	2.3	0.3	Ⅳ	F－14
59	砕片	黒曜石	12.25	9.4	3.8	0.2	Ⅳ	F－17
60	剝片	石英	20.4	17.8	6.15	1.4	Ⅳ	F－26
61	剝片	安山岩	25.05	18.9	4.15	1.7	Ⅳ	F－27
62	ナイフ	黒曜石	35.2	13.4	8.75	2.9	Ⅳ	DE－19
63	加工痕剝片	黒曜石	21.3	10.35	12.25	2.3	Ⅳ	F－62
64	砕片	黒曜石	12.6	6.45	3.2	0.2	Ⅳ	F－84
65	剝片	黒曜石	14.85	12.9	3.1	0.4	Ⅳ	F－43
66	砕片	黒曜石	9.2	11.9	3.3	0.4	Ⅳ	F－35
67	剝片	黒曜石	26.2	20.3	6.25	2.5	Ⅳ	DE－9
68	加工痕剝片	黒曜石	27.25	17.35	6.3	5.6	Ⅳ	DE－1
69	剝片	黒曜石	17.95	15.4	9.3	3.5	Ⅳ	DE－31
70	加工痕剝片	黒曜石	13.35	21.95	5.95	1.7	Ⅳ	DE－10
71	砕片	黒曜石	14.55	8.95	4.7	0.1	Ⅳ	DE－33
72	焼礫	砂岩	27.7	20.2	18.15	7.1	Ⅳ	D－9
73	剝片	黒曜石	17.7	14.4	12.95	1.7	Ⅳ	D－5
74	砕片	黒曜石	11.9	7.95	2.95	1.0	Ⅳ	DE－3
75	剝片	チャート	39.1	18.45	6.05	3.7	Ⅳ	E－2
76	剝片	安山岩	44.8	21.9	8.15	6.3	Ⅳ	DE－35
77	砕片	黒曜石	10.5	8.35	4.4	0.3	Ⅳ	F－68
78	砕片	黒曜石	16.3	10.7	4.85	0.5	Ⅳ	F－67
79	加工痕剝片	チャート	23.55	21.2	5.75	2.1	Ⅳ	F－66
80	剝片	黒曜石	21.85	11.6	4.05	5.0	Ⅳ	DE－11
81	スクレイパー	チャート	35.7	18.1	7.8	0.5	Ⅳ	E－11
82	砕片	黒曜石	20.9	11.75	3.05	0.5	Ⅳ	E－6
83	焼礫	砂岩	73.10	32.45	26.4	40.0	Ⅳ	E－5
84	焼礫	砂岩	85.6	42.95	27.8	103.6	Ⅳ	E－8
85	剝片	黒曜石	21.9	17.9	9.8	2.7	Ⅵ	DE－24
86	剝片	チャート	24.25	16.15	5.85	1.6	Ⅳ	DE－18
87	礫	砂岩	70.05	32.2	26.5	61.5	Ⅳ	DE－41
88	剝片	チャート	36.95	20.05	7.95	4.9	Ⅳ	G－4
89	剝片	チャート	29.3	18.25	6.10	3.0	Ⅳ	G－6
90	加工痕剝片	黒曜石	37.9	13.4	7.2	3.7	Ⅳ	G－9
91	剝片	不明	27.4	42.5	8.5	2.8	Ⅳ	DE－40
92	加工痕剝片	凝灰岩	27.15	21.6	5.05	3.3	Ⅳ	DE－34

第５章　縄文時代の遺構と遺物

１．縄文時代の遺構

縄文時代の遺構として今回の調査により、２軒の住居跡が検出された。調査区北側より検出順に番号を付していった。先に弥生時代の住居跡が検出され、１号住居跡としたために、検出された縄文時代住居跡をそれぞれ２号住居跡、３号住居跡と呼ぶことにする。

２号住居跡

本遺構は調査区の南側Ｓ－10区・Ｓ－11区、Ｔ－10区・Ｔ－11区にまたがって位置する。本遺構の17ｍ南には３号住居跡が存在する。遺構の東半分は調査区外に延びているために全体規模は不明であるが、検出された１辺は5.5m を測り、形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。

本遺構は、耕作による削平が激しく遺存状態が悪い。床面も明瞭ではなく、検出された壁高も高いところで４cm を測るのみで、南側部分では検出されなかった部分も存在する。柱穴・炉・壁溝は検出されなかった。

覆土は１層のみで、黒褐色を呈し締まりはやや緩く、粘性がややあり、焼土・炭化物粒子を若干含む状態であった。

出土遺物は、総点数41点を数える。縄文土器の小破片および焼石・礫のみであり、時期を決定付け得る遺物の出土はなかった。

３号住居跡

本遺構は、調査区の南側Ｗ－12区・Ｗ－13区、X-11区・Ｘ－12区にまたがって位置する。17m 北に２号住居跡が存在する。形態はほぼ円形を呈すると思われ、南北軸は4.4m を測る。本遺構の場合東側約2/1を検出したのみで西側半分が調査区外に延びているため、全体規模は不明である。

覆土は５層に分かれる。

第１層　黒褐色土、粘性やや有り締まりやや有り。赤色スコリアを若干含む。

第２層　黒褐色土、粘性やや有り締まりやや有り。赤色スコリア・ローム粒子を若干含む。

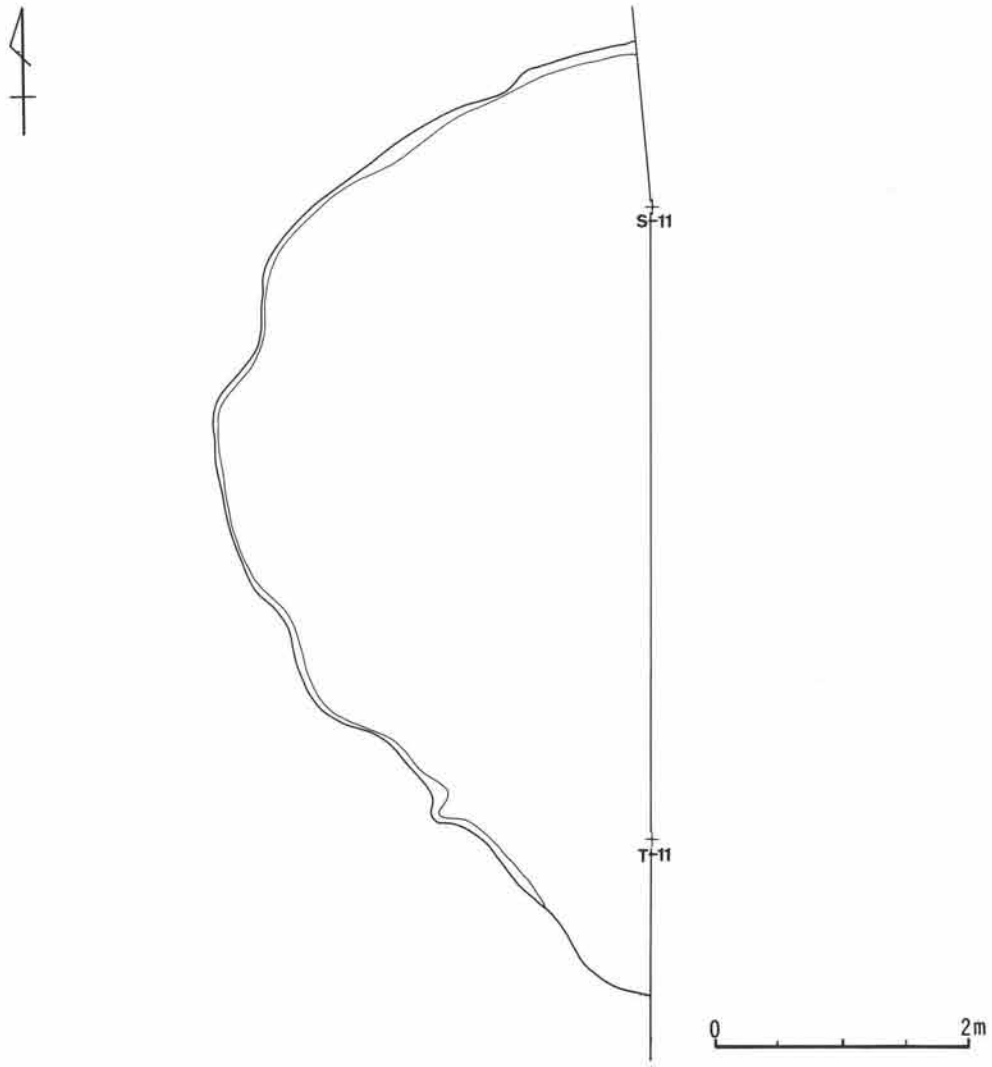
第３層　黒褐色土、粘性有り締まりやや有り。ローム粒子を多く含む。若干の焼土含有。

第４層　黒褐色土、粘性有り締まりやや有り。１cm 大のロームブロックを多量に含む。

第５層　黄暗褐色土、粘性強締まりやや有り。ロームを主体とする。

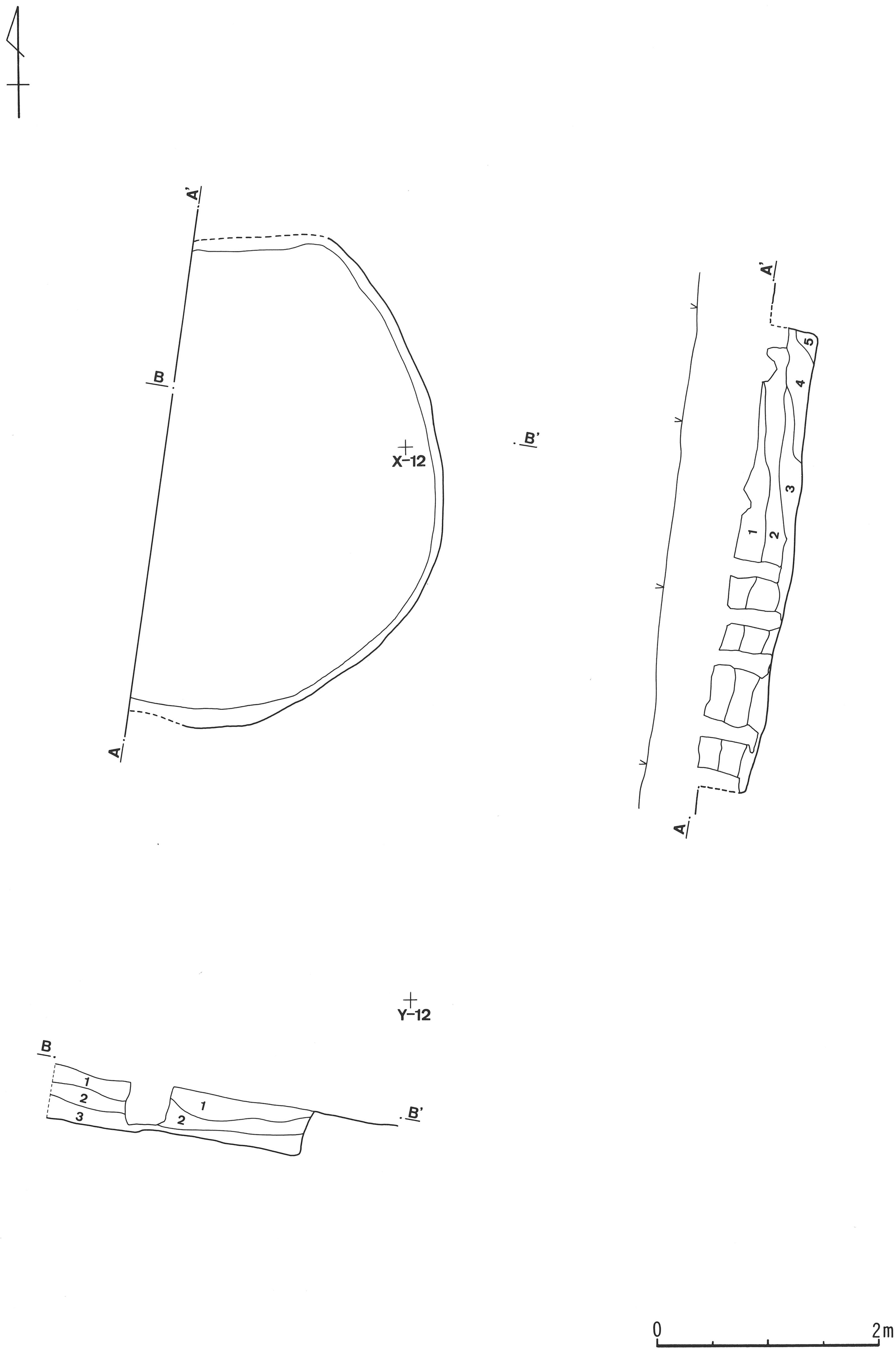
炉および柱穴の確認はなかった。壁高は最大部で52cm を測る。貼床はなく、床面はほぼ平坦であるが軟弱であった。

出土遺物は覆土中から縄文土器の小破片10点が検出されたのみで、時期を決定する遺物の出土はなかった。



第８図　２号住居跡平面図

２号住居跡



第９図　３号住居跡平面図

2．遺構外出土の縄文土器

縄文土器の散布は主に８ライン以南に見られ、２層中から小破片約300点が出土した。時期は、早期前葉撚糸文系から前期関山式に比定されるものである。

撚糸文系土器（９，10，36，37，39）

９，36は口縁部破片で、Ｒ撚糸が施される。文口縁部はやや外反する。10,39は胴部破片であり、Ｒ撚糸文が施される。いずれも胎土に雲母片および砂粒を多量に含有する。稲荷台式に相当すると考えられる。37は太目の撚糸により施文される。胎土に細砂を多量に含有する。稲荷原式に相当すると考えられる。

押型文系土器（１～２）

１は楕円形押型文、２は山形押型文が施される胴部破片である。器厚は５mm～７mm と薄手で焼成は良。

沈線文系土器（３～８，11～29，31～33，50～52）

３は口縁部破片である。口唇部内外面に木口状工具による刻目を有する。口唇部下を沈線で区画し、その中に貝殻腹縁文を押圧する。53，54は同一個体と思われる。細沈線により文様を施す。器厚は７mm を測る。焼成良。田戸上層式に相当すると考えられる。

４は胴部破片である。沈線文で区画し、横位・斜位に貝殻腹縁文を押捺する。器面は滑らかである。田戸下層式に相当すると考えられる。

５，６は格子状沈線文を施す胴部破片である。器厚は1.4cm を測る。胎土は共に細砂粒を多量に含み黄暗褐色を呈する。田戸下層式に相当すると考えられる。

７は並行する細沈線による区画内に半截竹管による刺突文が施される。８は太目の沈線による区画の中に刺突文を施す。胎土はともに細砂を多量に含む。焼成は良。11，28は細沈線によって施文される。胎土に雲母片を多く含有する。24，25は半載竹管の表面にて施文され、太目の明瞭な沈線を残す。25は波状口縁を呈する。縦位・斜位に沈線が施され、器面状態は良好である。以上は田戸下層式に相当すると考えられる。

52は胴部破片である。４条を１単位とする沈線が縦横に施される。表面は灰褐色を呈し焼成良。三戸式に相当すると考えることができよう。

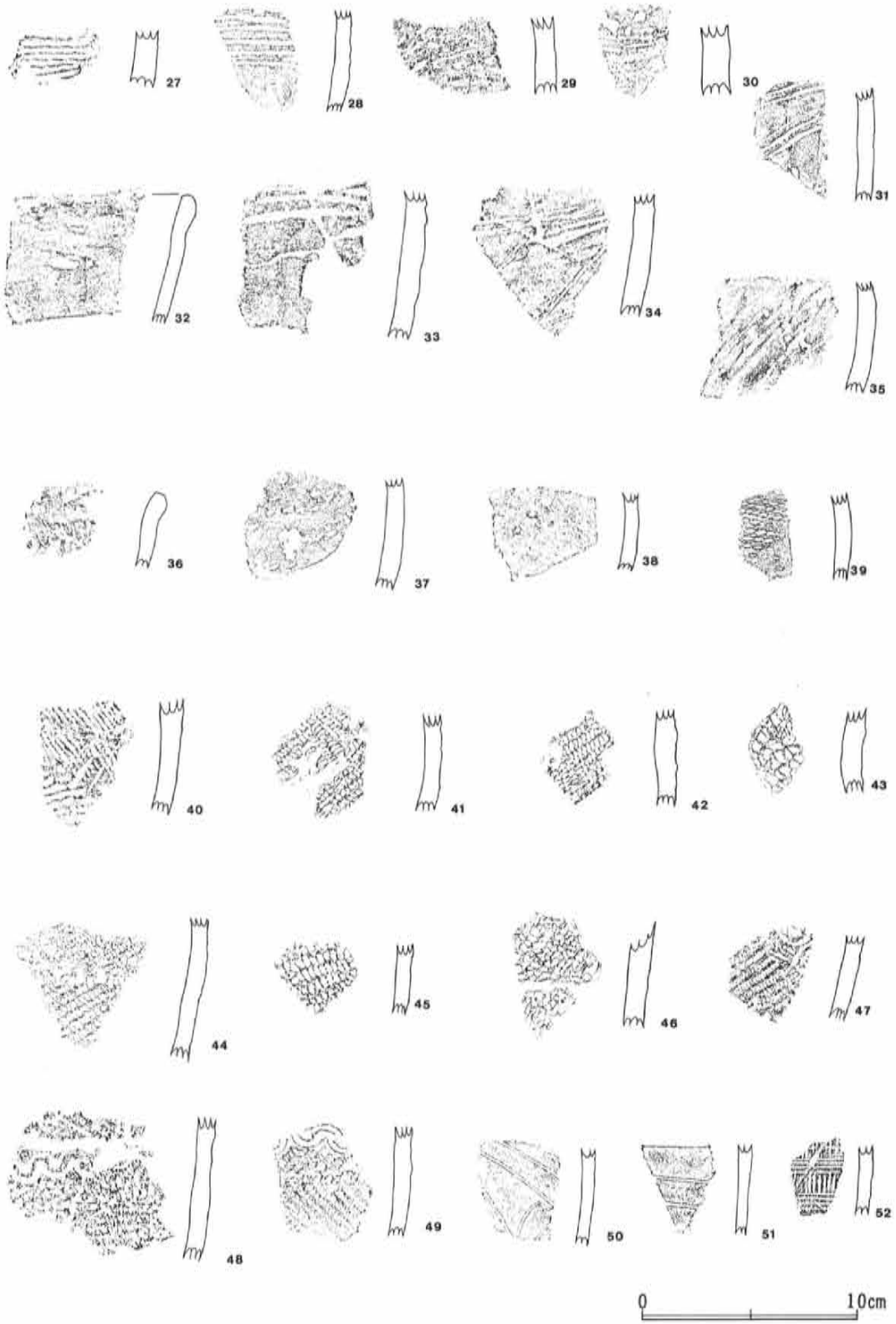
条痕文系土器（27，30，34，35，38）

27はほぼ並行する条痕が施される。胎土に細砂を多量に含み、橙色を呈する。35は斜行する条痕が部分的に施される。内面にも条痕が認められる。砂粒を多量に含有し、石英粒を含む。

羽状縄文系土器（40～49）

40～46は単節原体により施される。胎土に繊維を含有する。41・42は同一個体と思われ、菱形の施文を有する。44はループ文が施され、黄橙色を呈する。47はコンパス文が施され、胎土に繊維を含有する。49はループ文とコンパス文が施される。胎土に繊維を含み、黒褐色を呈する。40～49はすべて関山式に相当すると考えられる。

第10図　遺構外出土土器拓影図（１）



第11図　遺構外出土土器拓影図（２）

第6章　弥生時代の遺構と遺物

1．遺　構

1号住居跡

本遺構は、調査区の北側中央部に位置する。本遺構の南側半分は調査区外にのびているために全体規模は不明であるが、形態は隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－40°－Wと考えられる。確認面はⅢ層上面である。壁は約85°の角度をもってほぼ垂直に立ち上がっていた。住居跡の掘り込みは、確認面より深さ7cm～10cmを測る。耕作等により上面がすでに削平されていたためであり、セクションにより確認された掘り込みは、最深部で20cmを測る。

覆土は、4層に分かれる。

1層　黒褐色土　締まりやや弱。焼土粒子・炭化物を少量含有する。

2層　黒褐色土　締まりやや弱。粘性やや有り。焼土粒子を含有する。

3層　暗褐色土　締まりやや有り。焼土粒子・ローム粒子を含有する。

4層　暗褐色土　締まり有り。粘性有り。大粒のローム粒子を含有する。

床面は、ほぼ全面にロームブロックが多量に含有される土で貼床が施されており、非常に堅く踏み締められた良好な状態で検出された。

炉は、住居跡中央やや西寄りに存在したが、南側約2/1は調査区外にのびているために規模は不明である。

覆土は2層に分かれる。

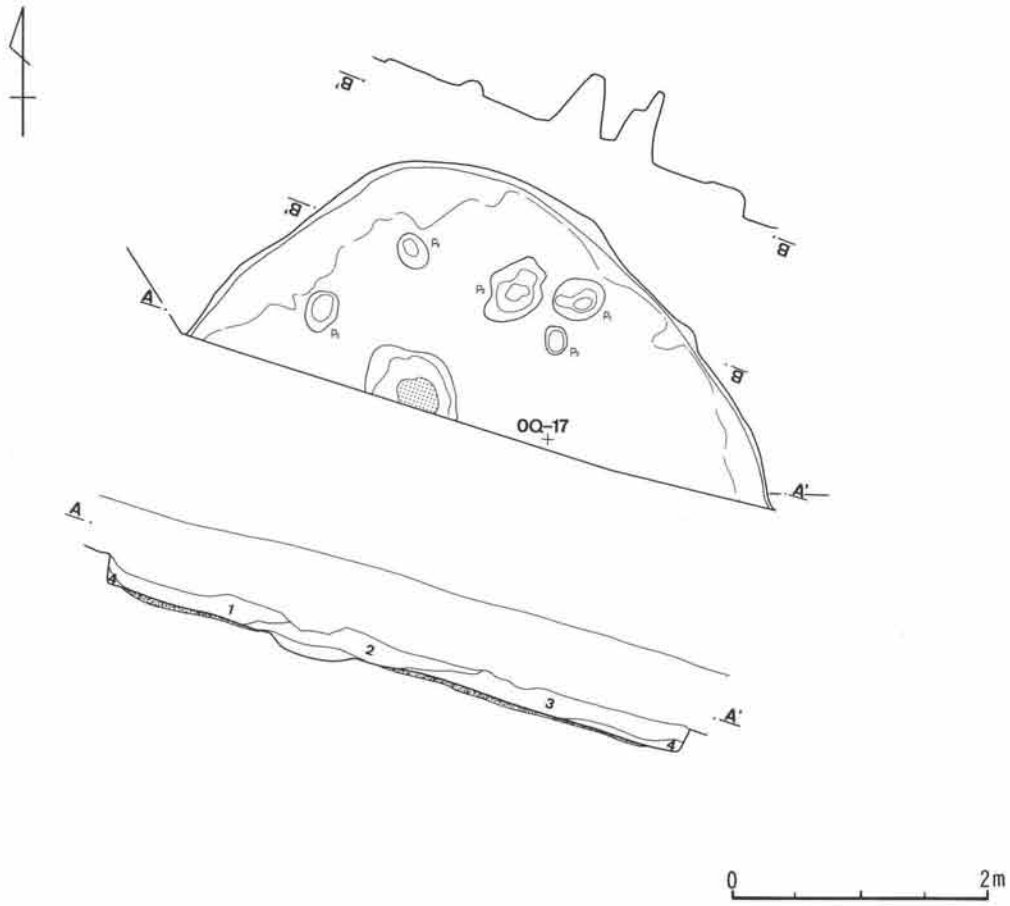
1層　赤褐色土　締まりやや有り。焼土粒子を多量に含有する。

2層　赤褐色土　締まりやや有り。焼土ブロック・焼土粒子を含有する。

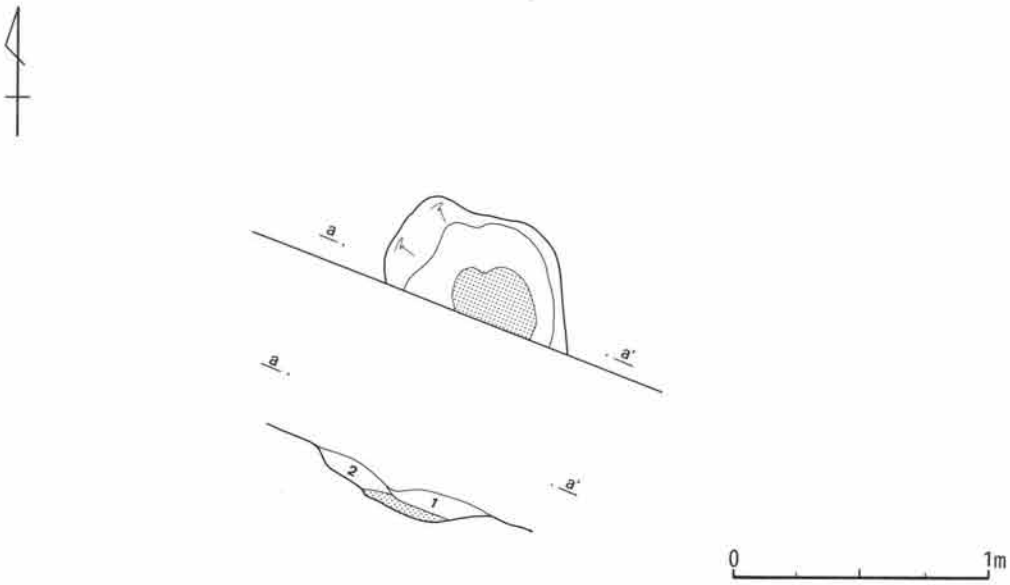
火床面は、床面より約10cm下がった位置で検出され、良く焼け締まった状態であった。

床面には、5個の穴（P_1～P_5）が確認された。P_1は40cm×33cm深さ58cmを測る。P_2は57cm×42cm深さ52cmを測る。P_3は22cm×18cm深さ20cmを測る。P_4は29cm×23cm深さ15cmを測る。P_5は33cm×26cm深さ18cmを測る。P_1及びP_2は柱穴と考えられる。

遺物は、総点数30点を数える。炉の周囲に集中が見られ、台付甕形土器脚台部1点（写真図版13－1）、口縁部1点（写真図版13－2）、胴部下位1点（写真図版13－3）、脚台部頸部1点（写真図版13－4）がまた、覆土中より壷形土器胴部片1点（写真図版13－5）が検出されている。



第12図　1号住居跡平面図



第13図　1号住居跡炉平面図

第７章　その他の遺構

１．焼土跡

本遺構はＵ－９区、Ｖ－９区にまたがって位置する。８ｍ南に３号住居跡が存在する。確認面は耕作により削平されていたためⅢ層上面である。

規模は、長軸32cm 短軸21cm を測りほぼ楕円形を呈する。掘り込みは最深部で５cm を測り、Ⅳ層までは達していない。

覆土は焼土の単一層である。断ち割りの結果、掘り込み面以下の部分は６cm ほどで厚さでロームが熱せられたように硬化していた。遺物の出土はなかった。時期は不明である。

本遺構は、焼土の状態・規模・形態、付近のグリッド出土遺物等から判断すると縄文時代早期の炉穴の可能性があることを附記しておく。

2．土　坑

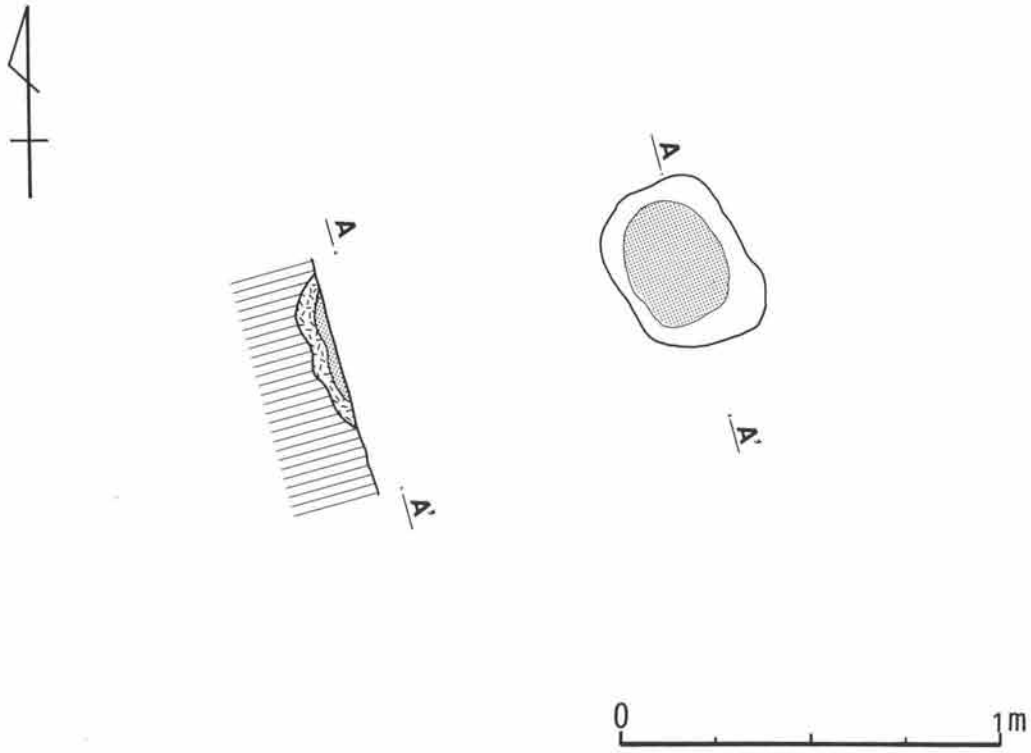
本遺構は、調査区の北側 ００－23区・００－24区にまたがって存在する。

規模は、長軸6.4m・短軸1.1m を測る。長軸方向はＥ－５°－Ｎである。形態は、長楕円形を呈し、断面形態は「ひ」の字状を呈する。確認面はⅢ層上面である。確認面空の深さは最深部で72cm を測る。

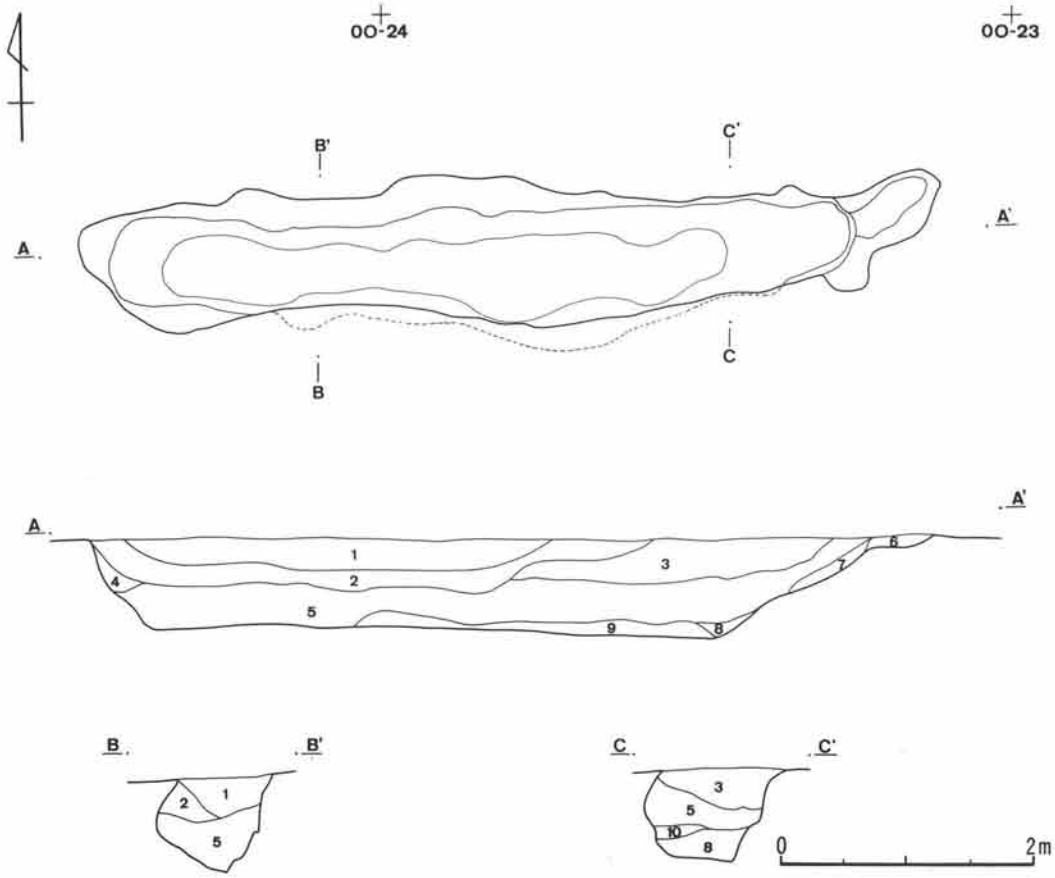
覆土は10層に分かれる。

１層　暗 褐 色 土　粘性・締まり弱。炭化物を少量含有。
２層　暗 褐 色 土　粘性やや有り。スコリアを極僅かに含有。
３層　暗 褐 色 土　粘性やや有り。ローム粒子を少量含有。
４層　暗 褐 色 土　粘性・締まりやや有り。ローム粒子を含有。
５層　黄暗褐色土　粘性有り。２cm 大のロームブロックを含有。
６層　暗 褐 色 土　粘性・締まり弱。ローム粒子を僅かに含有。
７層　黄暗褐色土　粘性やや有り。ローム粒子を少量含有。
８層　黄暗褐色土　粘性有り。３～５cm 大のロームブロックを多量に含有。
９層　黄 褐 色 土　粘性有り。ロームを主体とする土。
10層　褐　色　土　粘性・締まりやや有り。ローム粒子を含有。

出土遺物は、覆土中から時期不明の陶器小破片３点が検出されたのみである。



第14図　焼土跡平面図



第15図　土坑平面図

ま と め

古井戸山遺跡は、武蔵野台地を開析する柳瀬川左岸台地に上におよそ30,000m^{2}の広がりをもって存在する遺跡とされる。本遺跡付近の柳瀬川左岸縁辺部には、崖面より湧出する湧き水により小さな谷戸が幾つも形成されている。この谷戸に沿った所には必ずと言ってよいほど遺跡が存在している。本遺跡でも今回調査を行なった地点の東側に、現在も湧水源を持つ谷戸が存在する。本遺跡付近での現在の柳瀬川の沖面積では標高10m、台地上では30mであり比高差は約20mを測るが、崖面途中標高20m付近で部分的にテラス状の平坦部分が見られる。この部分からは弥生時代後期と考えられる台付甕形土器脚台部が出土したことが知られている。また、本遺跡を有する柳瀬川の崖線上には鎌倉街道の名を残す中世の古道も残っている。

本遺跡は過去に試掘調査1回・発掘調査1回を実施している。この2回の調査はともに谷戸の周辺を中心とした崖面の調査であり、縄文時代早期中葉・前期～中期の土器、縄文時代終末期および弥生時代中期～後期にかけての土器、平安期の坏、中世陶器・板石塔婆等が出土している。今回の調査では、旧石器時代石器製作跡、縄文時代早期前葉～早期末葉および前期の土器、弥生時代の住居跡が検出されている。また、表面採集資料として縄文時代後期の土器および縄文時代前期と推定される石鏃も発見されている。このことから本遺跡は旧石器時代・縄文時代早期～終末期・弥生時代中期～後期・平安時代・中世にわたる複合遺跡であるといえる。なかでも縄文時代早期～前期にかけての遺物および弥生時代後期の遺物が多く検出されていることが注目される。

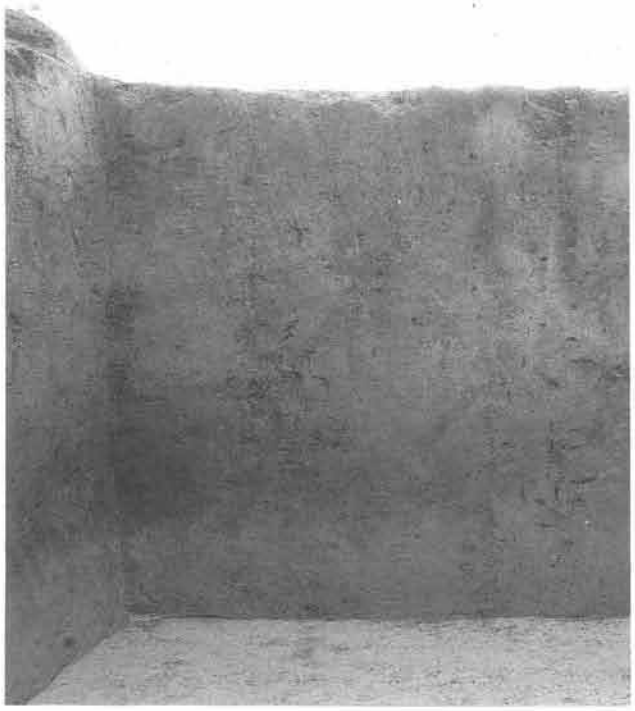
縄文時代早期～前期の遺物の分布は今回調査を行なった部分の南から西側部分にかけて広がりを持っているようである。この部分の未調査部分からは焼礫・石鏃・早期の土器片が多量に認められ、住居跡を伴う集落を形成していた可能性が強いと思われる。とりわけ石鏃・黒曜石・チャーノの剝片・破片が多く存在することから石器の加工跡の存在も否定できないところである。また、縄文時代後期の遺物は、早期～前期遺物分布範囲のさらに南側新座市との行政堺付近に広がりをもつと思われる。弥生時代の遺物・遺構の広がりは、縄文時代の遺物の広がり部分の北・および北東側の谷戸を中心とした部分にあると考えられる。遺跡の東側に存在する谷戸はボーリング調査によりかなり埋没していると考えられ、谷頭は現在より台地の奥部に存在していたものと推定される。この埋没谷対岸の遺跡の広がりは明確ではないが、隣接する部分には縄文時代中期の遺物弥生時代後期住居跡・方形周溝墓・古墳時代後期住居跡等が検出された本村南遺跡が存在している。古井戸山遺跡の場合、この谷戸の豊富な湧水が遺跡の存在を可能としたものであると考えられる。

今回の報告は時間的制約もあり事実報告のみにとどまったが、本遺跡の東隣に存在する本村南遺跡との関係も興味あるところであり、今後資料の増加を待ち遺物の詳細な検討を行ない明らかにしていきたい。最後に、今回の報告で縄文時代の住居跡として報告した2号住居跡・3号住居跡は、遺構の1/2を検出したのみであり、炉・住穴等の検出がなかったことから竪穴状遺構（土坑）の可能性もあることを付記しておく。

古井戸山遺跡遠景（航空写真）

調査区全景（航空写真）

写真図版 2



土層写真

調 査 風 景

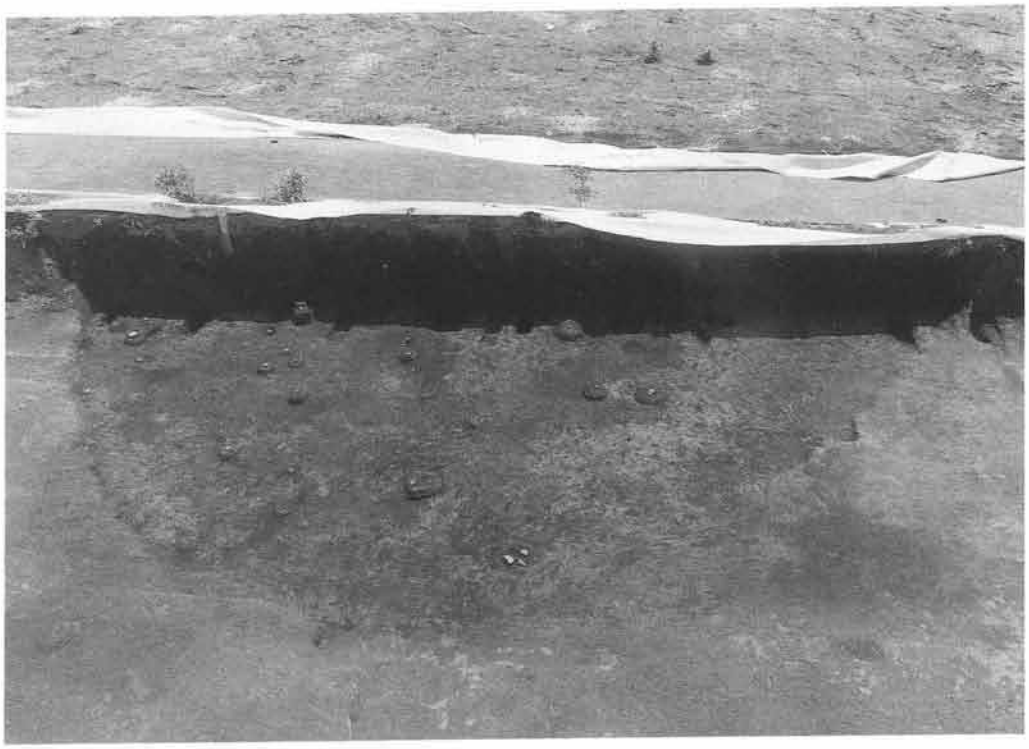
旧石器時代遺物出土状況（IV層）

旧石器時代遺物出土状況

写真図版 4

Ⅳ層遺物出土状況

Ⅵ層遺物出土状況



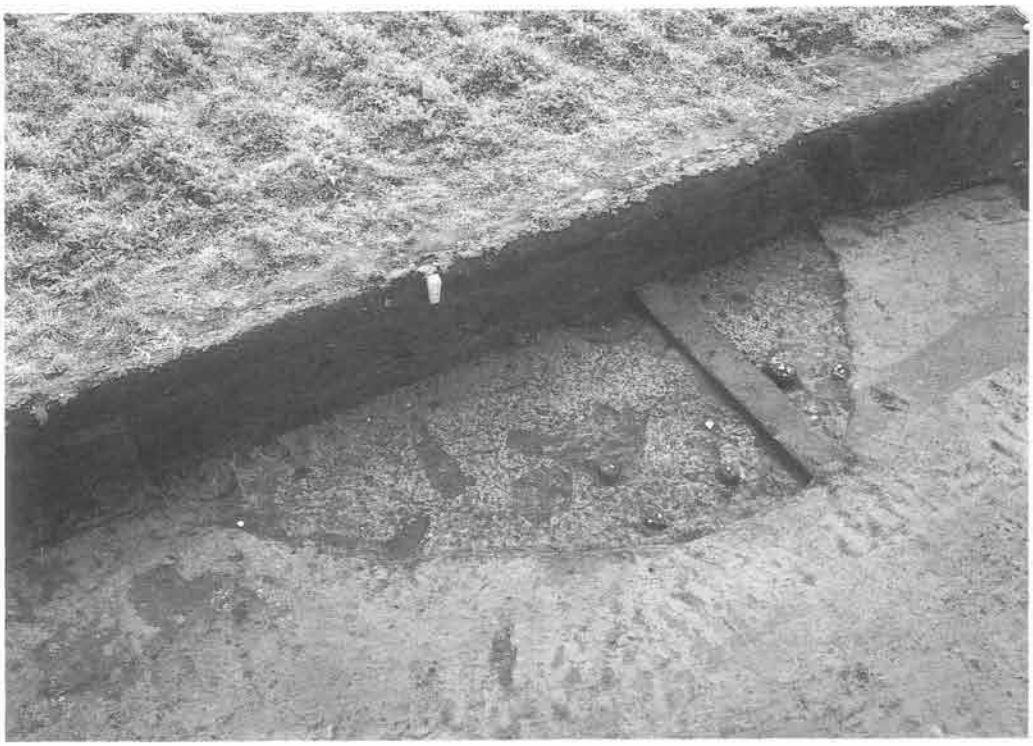
2 号 住 居 跡

調 査 風 景

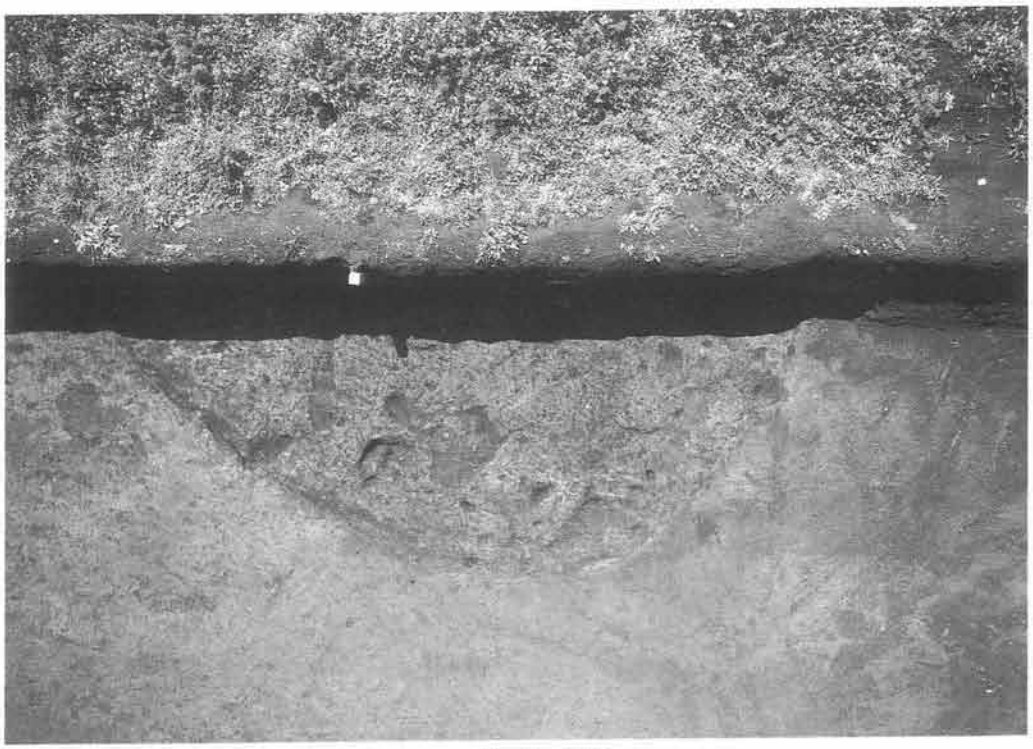
写真図版 6

3 号住居跡遺物出土状況

3 号住居跡完堀

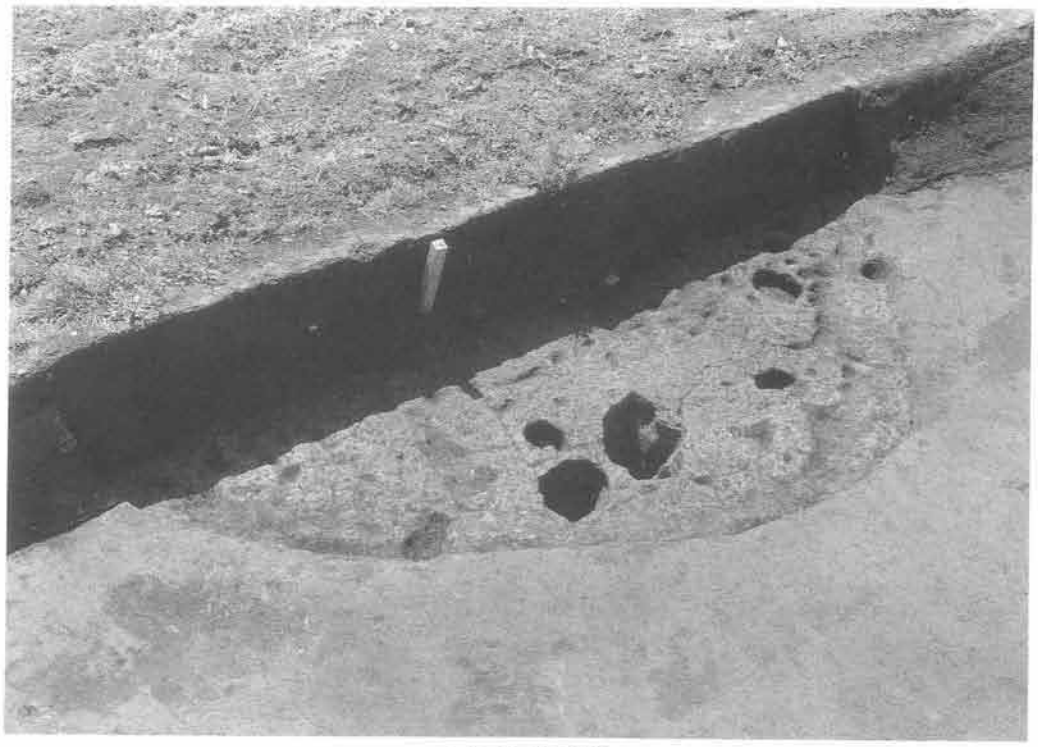


1号住居跡遺物出土状況



1 号 住 居 跡

写真図版 8



1 号住居跡完掘

1 号住居跡炉

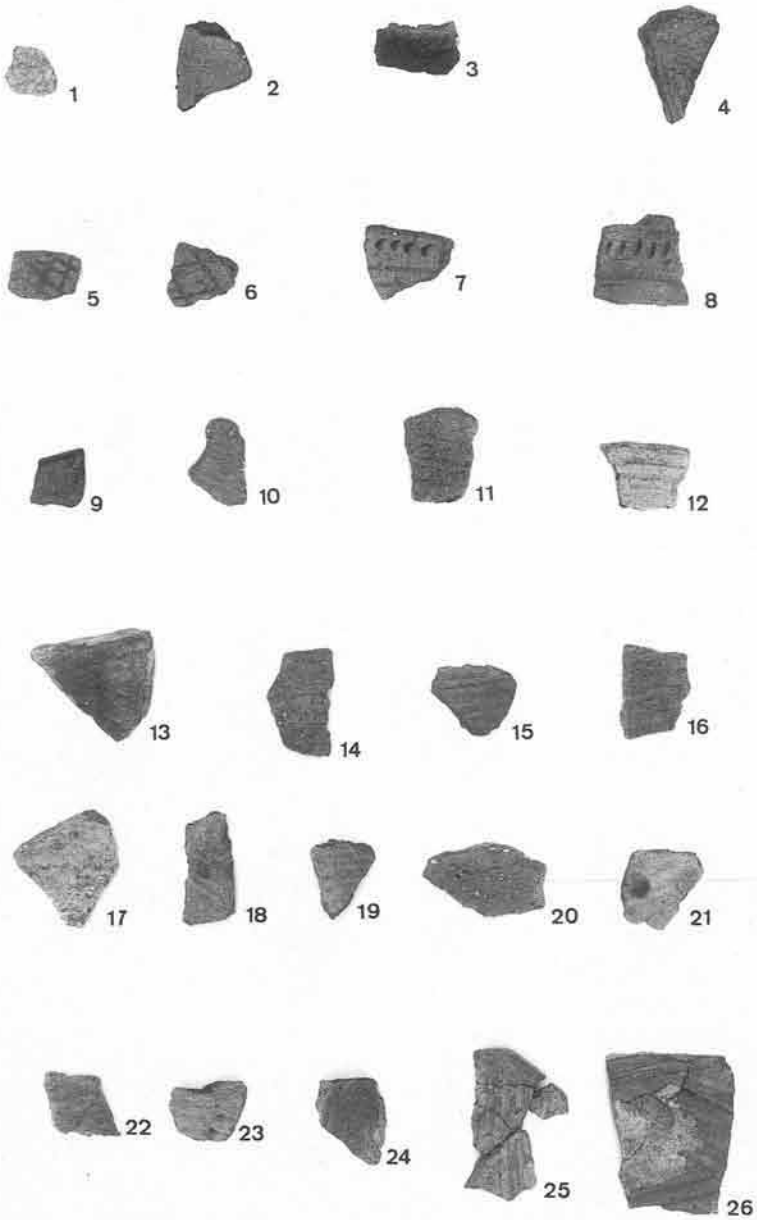
焼土跡完掘

土坑検出状況

写真図版 10

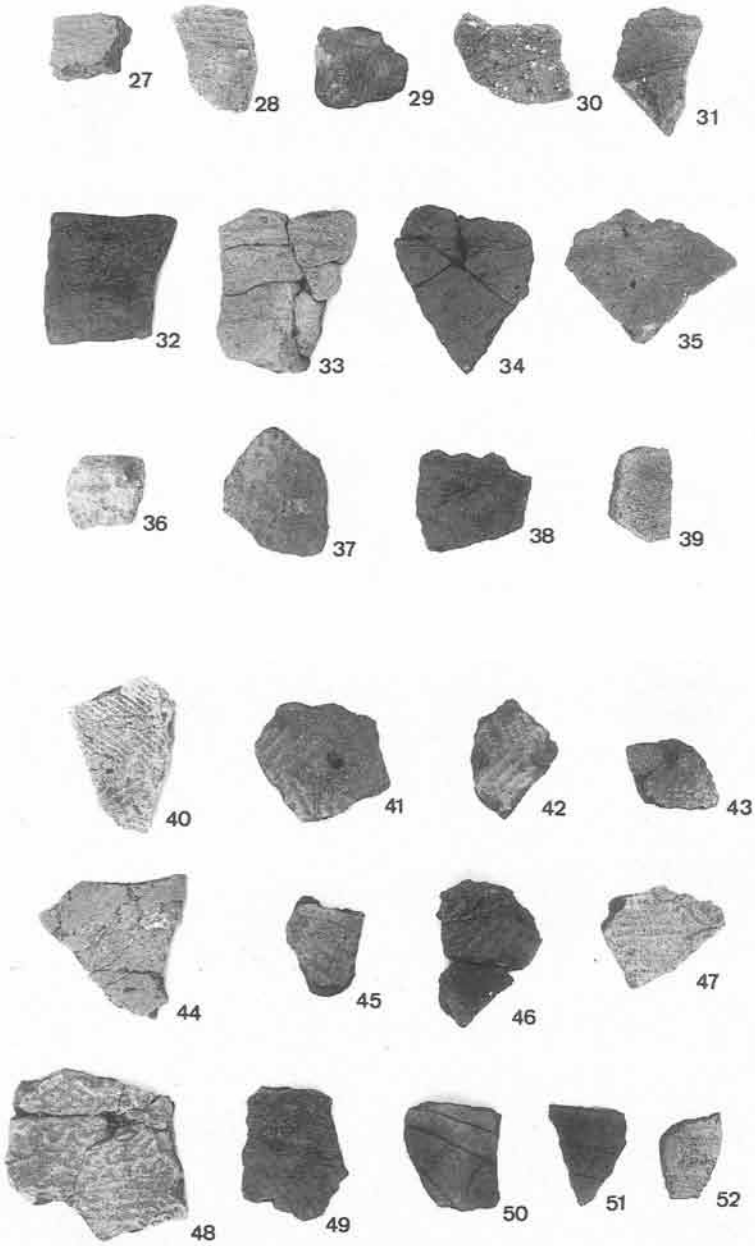
ユニット 1 出土石器

ユニット 2 出土石器



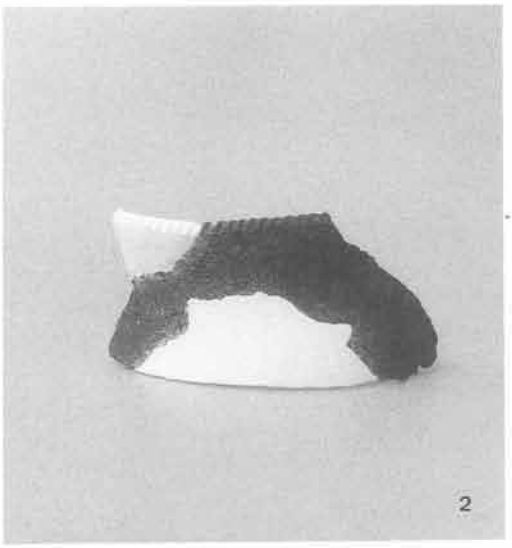
遺構外出土土器（1）

写真図版 12



遺構外出土土器（2）

1


2

3

4

5

1号住居跡出土遺物

埼玉県入間郡三芳町

古井戸山遺跡発掘調査報告書

発　　行　　平成２年３月30日
編集発行　　三芳町教育委員会
印　　刷　　新日本印刷株式会社